

# 十全同窓会会報

〒920-8640  
金沢市宝町13の1  
金沢大学医学部  
十全同窓会会報  
編集委員会  
印刷/ヨシダ印刷(株)

(題字：中村信一 十全同窓会会長)

## 卒業生に贈る言葉

医学類長・医学部長 多久和 陽



本年、医学類および医学部は九十六名の卒業生を送り出しました。金沢大学医学類の教職員を代表して、皆さんに心よりお祝いを申し上げます。

皆さんの社会への門出にあたり、三つのことを申し上げたいと思います。皆さんはほぼ全員が、これから初期臨床研修医として医師としての第一歩を踏み出されます。初期臨床研修を終えた二年後の進路は、引き続き大学などでの専門医研修、大学院へ進んで基礎医学研究、医療行政の道に進み広い視野から国民の健康問題に取り組む等さまざまでしょう。どの道に進むにしろ、皆さんの毎日はいへん忙しいもので

す。多忙な日常の中で、心がけて頂きたいことがあります。それは、皆さんが、「あなた自身の価値をつくる」、これからの皆さんの人生において「あなた自身自身のユニークなキャリア」を育てること、これを常に意識していただきたいと思えます。そのため、医学という間口が広く奥の深い学問分野の中から、あなた方が生涯をかけて打ち込めるものをぜひ見つけてください。

二つ目に、皆さんにはこれから多くの方々との出会いがあります。この出会いを大切にしてください。よい指導者とその方を中心としてかもしだされるアトモスフィアは、みなさんの成長にとり本当に大切です。皆さんを感化してくださるすぐれた方との出会いは、皆さんの積極性によって導かれるかもしれません。皆さんを感化してくださる方との出会いを大切にしてください。

三つ目に、よい習慣を身に付けることの大切さです。十九世紀末から二十世紀初めにかけて、米国のジョンズホプキンス大学医学部の設立にかかわり、北米の医学教育の基礎を築いた医学者に、ウィリアム・オスラー博士

という方がいます。オスラー博士はこう述べています。「人生は習慣であり、よい習慣を身につけることが大切である」と。医師、研究者として成長するために重要な資質、つまり、よく観察する習慣、集中して考える習慣、系統的に対処する習慣、学習する習慣、こういった資質を努力して育て上げ身に付けていくことが大切であると述べています。長年にわたり絶えず繰り返すことによつて身についた確固としたよい習慣は、大きな力となつて皆さんの成長を導くと思えます。

どの道を歩まれるにしても、これからの長い人生の間には、思いがけないことが起こります。社会でいかに困難な場面に遭遇しても、戸惑うことなく正面から状況に向き合つてもらいたいと思えます。これから出会うさまざまな課題、困難に英知を傾けて正面から取り組み、これを乗り越えて成長されることを心から願います。日本の医療には、よいところがたくさんあります。非常に公平で一定以上の質の医療が全国どこでも受けられます。これは国際的に見ると恵まれています。しかし、人口の高齢化が進む中で、医療費が増大し、これからの医療には解決すべき困難な課題が待ち受けています。国際医療の専門家によりますと、今、諸外国はどこも日本の医療の将来に注目しているとのこと。それは、自分たちの国が高齢化する前に、高齢化先進国である日本の成功あるいは失敗を見ておこうということ。どの道に進まれても、皆さんは医学・医療から離れることはありません。金沢大学で学んだ皆さんには、ぜひ広い視野から国民の健康に関心をもち、国民の幸せのために、皆さんの専門知識・能力をつかって下さい。

皆さんのご健闘をお祈りします。

平成二十七年年度  
金沢大学医学部十全同窓会総会

日時 平成二十七年七月四日(土)  
午前十時

場所 金沢大学医学部記念館  
(懇親会場：医学図書館ブックラウンジ)

式次第

- 一、開会の辞
- 一、議長選出
- 一、議長挨拶
- 一、物故会員に対する黙祷
- 一、会務報告 理事長
- 一、医学系研究科報告
- 一、医薬保健学総合研究科長・医学系長 医学類長
- 一、支部長紹介(報告は懇親会で)
- 一、議案審議

- (一) 平成二十六年度事業及び決算報告
- (二) 平成二十七年年度事業計画
- (三) 平成二十七年年度予算(案)
- (四) 役員改選
- (五) 百五十周年関連事業について
- (六) その他
- 一、閉会の辞

### 《教授就任講演》

- (一) 分化の波の数値モデルと遺伝学的解析  
分子種群学部門 佐藤 純 教授
- (二) 代謝リモデリングによる  
栄養恒常性の維持と破綻  
環境医学専攻 包括的代謝学分野 佐藤 純 教授
- (三) 薬物療法の安全性と  
新たな可能性を求めて  
循環医学専攻 医薬情報統御学分野 佐藤 純 教授

特別講演及び教授就任講演は、脳医学専攻・がん医学専攻・循環医学専攻・環境医学専攻のUp-to-dateトピクスを兼ねます。  
石川県医師会生涯教育研修会指定を受けております。多数ご来聴下さい。

教授 就任 挨拶

竹村 博文博士 (昭和六十年卒業)  
心臓病態制御学教授に就任



平成十年からは二年間、ニューヨークランド、オークランド市にあるグリーンレーン病院に留学の機会を得て、多くの執刀経験をえました。私にとっては異文化、異言語のなかで二年間生活できたことは大きな自信になったと思っております。若い人たちにも海外での研鑽を奨める根本はここにあります。

平成二十七年二月十六日付で、金沢大学医薬保健研究域医学系 心臓病態制御学(旧第一外科)の教授を拝命いたしました。私は昭和六十年に本学を卒業後、当時岩倉教授の主宰する第一外科に入局し、心臓血管外科を中心に、消化器外科、呼吸器外科を含めて研修して参りました。虚血性心疾患を研究テーマとし、特に冠動脈バイパスグラフトの血流の評価を研究して参りました。骨格筋の心臓への応用に関する研究で、右心不全モデルに広背筋を心臓に被覆し駆動させ、心機能補助効果を証明し学位を取得いたしました。その後国立金沢病院(現金沢医療センター)の心臓外科立ち上げなど、関連病院の心臓血管外科でさまざまな方々から研修の機会をいただきました。

平成十五年十月から岐阜大学高度先進外科(旧第一外科)の教授として十一年間勤めて参りました。平成十六年から始まった新研修医制度の真只中という厳しい環境の中、同門の方々からの暖かいご支援の下、ある程度の臨床成績、研究成果を上げることができ、十一名の博士号取得にこぎつけたことは嬉しく思います。また文部科学省の大型プロジェクトの研究統括を八年間させていただいたことは、産官学連携の重要性を学ぶことができ大きな糧となりました。

この度縁ありまして、母校に奉職できますことは大きな喜びでございます。これまでの大学人としての経験を生かし、臨床、研究、教育に邁進して参る所存でございます。十全同窓会の先生がたにおかれましては旧に倍してのご指導、ご鞭撻をお願い申し上げます。

塚 正彦博士  
法・社会環境医学 (法医学) 教授に就任



導を約八年間賜りました。

平成二十七年二月一日付で、医薬保健研究域医学系法・社会環境医学(法医学)の教授を拝命いたしました。私は平成三年に愛媛大学を卒業、医師免許取得と同時に、本学病理学第一講座を主宰する中西功夫教授のもと病理医としてのトレーニングを開始いたしました。平成七年大学院医学研究科(病理専攻)博士課程修了後直ちに助手にして頂き日本病理学会認定医(現専門医)資格取得、以後金沢医科大学病理学第二講座(勝田吾吾教授(現学長)の指導で講師となりました。以後血管研究の発展を望み、平成十四年から米国スクリプス研究所勤務を経て、帰国の平成十八年より法医学に専門を変え、本学前任の大島徹教授から法医学の実務及び教育・実習の指

導を約八年間賜りました。研究の専門では、中西主任教授、勝田教授並びに岡田保典教授(前慶応義塾大学病理学)のご指導を仰ぎながら医学博士の学位をヒト大動脈粥状硬化におけるマトリックスメタプロテアーゼの免疫組織化学および生化学的研究で取得以来、血管壁組織脆弱性をキーワードとして参りました。循環器領域で冠動脈症候群、がん領域で微小環境における悪性腫瘍の脈管侵襲、さらに法医学領域では内因性急死を対象に、二十年以上にわたり一貫した研究を現在まで継続できたことはひとえに指導者や同僚に恵まれた結果であると思っております。皆様は要所で医師や人間としての正しいありかたを自ら示される一方で、常に私の自立を尊重して下さいました。

本学法医学教授として私は六代目ですが、石川県出身者としては初めてとなります。このたび金沢大学への奉職を続けると共に、出身地の死因究明に貢献できる立場を頂き身に余る光栄を感じております。同窓会の先生方におかれましては一層のご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

## 山本 靖彦博士 (平成四年卒業) 血管分子生物学教授に就任



平成二十七年五月一日付で、金沢大学医薬保健研究域医学系 血管分子生物学 (旧 生化学第二) 教授を拝命いたしました。

私は、平成四年に本学を卒業後直ちに小林健一教授が主宰されていた第一内科学教室に入局しました。糖尿病・代謝・内分泌を臨床の専門領域としておりましたが、大学院修了後、研究に集中したいという本来の気持ちから、基礎医学研究者に転身することになりました。平成九年から約三年間にわたりまして東北大学医学部医化学教室の岡本宏教授の指導を受け、遺伝子改変技術、マウス胚操作やES細胞技術を習い、平成十二年からは、山本博教授が主宰される生化学第二教室に助手として戻り、以降の研究活動が続けてきました。特

に、糖化 (グリケーション) 反応と称される非酵素的なタンパク質翻訳後修飾産物 Advanced Glycation End-products (AGE) の細胞表面受容体 (Receptor for AGE, RAGE) の遺伝子改変動物を作製・解析することで、RAGEの糖尿病合併症への関与のみならず、炎症性疾患、がん等の様々な老化・加齢関連疾患における役割を明らかにすることができました。平成十八年からは約三年間にわたりハーバード大学医学部ジュスリン糖尿病センターの Shoelson 教授の下で代謝異常が引き起こす炎症について、自然免疫細胞を中心に研究を行いました。帰国後は新しい技術・手法を取り入れ、これまでの研究を統合し、さらに発展させてきました。私自身が経験し、肌で感じてきた教室・大学・国の枠に囚われない研究スタイルで、これまで山本博先生が築き上げてこられた伝統ある教室の運営を引き継ぎ、今後もポストゲノム時代を切り開く研究活動を継続して参ります。

最後にありますが、十全同窓会の先生方におかれましては、今後ともより一層のご指導ご鞭撻を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

## 大場 洋博士 (昭和六十年卒業) 帝京大学医学部放射線科学講座教授に就任



しております。今後皆様のご指導、ご鞭撻のほど何卒よろしくお願い申し上げます。

平成二十七年四月一日付で、帝京大学医学部放射線科学講座教授を拝命いたしました。私は昭和六十年に金沢大学を卒業後、大学院に進み、久田欣一教授が主宰された核医学講座に入局しました。松田博士先生 (現在国立精神・神経医療研究センター脳病態統合イメージングセンター長) のご指導のもと中枢神経核医学の研究をさせていただきました。学生時代は核医学診療科絹谷清剛教授らとラグビー部に所属していました。西医体では三位になったことがあります。ラグビー以外での思い出では、大学一年生の初夏に、酔って兼六園の霞が池で泳いだことでしょうか (私は泥酔していて泳ぐどころではありませんでした)。古き良き時代でした。大学院卒業後は、山梨医科大学を経て、帝京大学に入職し十五年目になります。神経放射線診断を専門とし

### 春の叙勲

瑞宝小綬章

小西 孝司  
(昭和四十二年卒業)

旭日双光章

齋藤 建二  
(昭和四十年卒業)

万が一遺漏がある場合は御寛恕の上お知らせ頂ければ幸いです

## 松成 一郎博士 (昭和六十二年卒業)

### 埼玉医科大学病院核医学診療科教授に就任



平成二十七年四月一日付で埼玉医科大学病院核医学診療科の教授を拝命いたしました。私は昭和六十二年に本学を卒業後、久田欣一教授が主宰された核医学講

座に入局し、ご指導をいただきました。大学院では心臓核医学を専攻し現在の私の礎となっています。平成三年より福井県立病院放射線科に勤務し、平成七年より二年間ミュンヘン工科大学核医学科に留学しました。このSchwalger教授に師事し、充実した研究の日々を送らせて頂いたことを感謝しています。当時の研究仲間は今も良き友人です。帰国後、利波紀久教授主宰となった核医学講座に再びお世話になり、平成十年から先端医学薬学研究センター(羽咋市)に勤務しました。この間、本学神経内科の山田正仁

## 矢形 寛博士 (平成二年卒業)

### 埼玉医科大学総合医療センターブレストケア科教授に就任



私は平成二年に金沢大学医学部を卒業後、千葉大学医学部第一外科学(現在の

臓器制御外科学)教室に入局し、乳腺グループに属して臨床、研究を進めてきました。平成十六年より聖路加国際病院ブレストセンターに移り、年間八百例を超える手術件数の中で貴重な経験をさせていただきました。特に乳房温存治療における根治性と整容性のバランスについての啓発普及や、近年話題となっている遺伝性乳癌・卵巣癌症候群の診療については、国内で先導的役割を果たしてきました。その後センター長の中村清吾先生が昭和大学の

教授や金沢医科大学循環器内科の竹越襄教授(現金沢医科大学理事長)、梶波康二教授をはじめとする様々な先生方との出会いがあり、心臓核医学や認知症の画像診断研究に取り組んで参りました。良き先生方、仲間恵まれたことは幸運で

## 伊藤 研一博士 (昭和六十三年卒業)

### 信州大学医学部外科学第二教室乳腺内分泌・呼吸器外科部門教授に就任



平成二十六年十一月付で、信州大学医学部外科学第二教室、乳腺内分泌・呼吸器外科部門教授を拝命いたしました。

私は昭和六十三年に本学を卒業後、飯田太教授が主宰されておりました信州大学外科学第二教室に入局しました。その後、大分医科大学および九州大学の生化学教室で桑野信彦教授のご指導のもと、腫瘍血管新生機構の研究を行いました。信州大学に戻つてからは、外科学第二(天野 純教授)および関連病院で診療に従事し、乳癌や甲状腺癌の診療を行う中で、抗癌剤耐性機構に関心を抱き、平成十年から、抗癌剤を排出する膜輸送タンパク質Multidrug resistance protein 1

あつたと思います。今後は金沢で学んだことを埼玉の地で活かすべく一層の努力を続けて参りたいと存じます。十全同窓会の先生方におかれましては引き続きご指導のほど宜しくお願い申し上げます。

(MRP1)を発見された、カナダのクイーンズ大学がん研究所のSusan Cole教授のもとでMRP1の機能解析を行いました。平成十三年に帰国後は、乳腺内分泌外科での診療の傍ら、教室の若手や大学院生と一緒に研究を継続してまいりました。

今回、信州大学医学部では、外科学第二教室に二名の教授をおくことになり、岡田健次教授(神戸大学から)が心臓血管外科部門を、私が乳腺内分泌・呼吸器外科部門を担当させて頂くことになりました。私が担当する部門は、主に乳癌、肺癌、甲状腺癌、縦隔腫瘍など、腫瘍の診療を行う部門になります。臨床および研究の成果を世界に発信できる教室を目指し、教職員と一緒に努力していきたいと思えます。腫瘍の分野では、分子生物学的視点が必要になっており、新しい治療戦略を考えていく上で必須となっております。外科医師不足が続いており、優れた臨床能力だけでなく、科学的思考(humanityを兼ね備えた、次世代を担う「Academic surgeon」)

教授として、また金沢大学同門の津川浩一郎先生が聖マリアンナ医科大学の教授として異動されました。今回縁があつて、平成二十七年四月より埼玉県川越市にあります埼玉医科大学総合医療センターの教授職を拝命いたしました。当センターは病床数も九百を超え、地域医療の中核を担っています。科名をプレストケア科

と変更し、「キユア」だけでなく、乳がん患者が社会の中で安心して暮らせるよう「ケア」を重視していくというミッションを掲げました。今後十全同窓会の先生方との交流を深めながら地域医療に貢献していく所存ですので、ご指導のほどよろしくお願ひ申し上げます。

## 若山 友彦博士 (平成六年卒業)

### 熊本大学大学院生命科学研究部生体微細構築学教授に就任



平成二十七年四月一日付で、熊本大学大学院生命科学研究部生体微細構築学教授を拝命いたしました。

私は、平成六年に本学を卒業し、解剖学第一講座において井関尚一教授の指導を受けてきました。井関教授から直接、組織化学法の原理とその実践を学び、「種々の器官・組織の発生、生後発達、増殖、分化において重要な役割を演ずる生理活性物質の発現、局在およびその制御」という教室の研究テーマに沿って「細胞接着分子による精子形成の調節機構」を研究してきました。幸い、精子

形成に必須である新規の細胞接着分子 CADMI (Cell Adhesion Molecule-1) を同定し報告することができました。精子形成の調節因子としての細胞接着分子の役割と意義は研究の途についたばかりです。熊本大学でも引き続きこの研究を行っていく所存です。

熊本大学では、学部生と大学院生に対する組織学の教育を主に担当します。この会報が先生方のお手元に届く頃、初めての学部生の組織学の講義と実習が始まります。金沢大学の組織学教育は、歴代の教授によって培われた伝統に支えられた教育で、全国的に見ても質・量ともに非常に高いレベルにあります。金沢大学の組織学教育をお手本に、熊本大学でも金沢大学に引けを取らない組織学教育を築き上げたいと思います。

私は、平成十六年より十全同窓会報編集委員にたずさわり、昨年は絹谷清剛編集委員長のもと編集副委員長を務めました。四月からは学外編集委員として、こ

育成すべく尽力する所存です。

北陸新幹線が開通し、金沢と信州が近くなりました。学生時代には勉学より部活動（バレーボール）に重きを置いていた浅学非才の身であります。十全同窓

## 常山 幸一博士 (平成四年卒業)

### 徳島大学大学院ヘルスバイサイエンス研究部環境病理学分野教授に就任



平成二十七年二月一日付で、徳島大学大学院ヘルスバイサイエンス研究部環境病理学分野の教授を拝命いたしました。私は平成四年に金沢大学を卒業後、中沼安二教授が主宰された病理学第二講座の大学院にすすみ、研究、診断、教育のいずれにも全力で取り組む諸先輩方に厳しくも温かいご指導をいただきました。大学院時代には、カリフォルニア大学デービス校の Gershwin 教授のもとに

の会報が同窓生の架け橋であり続けることに貢献していきたいと思ひます。

最後に、十全同窓会の熊本支部は長らく支部長不在が続いています。熊本県の会員の先生方は数名と少ないですが、他

会の先生方におかれましては、ご指導ご鞭撻の程、何卒宜しくお願ひ申し上げます。末筆となりましたが、母校の益々のご発展を願っております。

留学する機会を得、肝臓を標的とする自己免疫疾患である原発性胆汁性肝硬変の病態機序についての研究を開始いたしました。以後、一貫して肝臓病理学研究、免疫病理学研究に従事しております。平成十四年には富山医科薬科大学に新設された病理部に准教授として採用され、以後、富山で十二年間を過ごしました。富山では和漢薬やイタイイタイ病など地域に根ざした研究にも対象を広げるとともに、病理診断や学生、若手病理医の育成にも力を入れ、「研究、診断、教育のバランスに富んだ病理医」像を追求して参りました。四国の地でも、魅力溢れる研究、正確で信頼される病理診断、学生教育や若手病理医の育成に、全力で取り組んでいく所存でございます。今後ともご指導ご鞭撻のほどを何卒宜しくお願ひ申し上げます。

県の先生方とも連携して九州地区全体で十全同窓会を盛り上げていきたいと思ひます。十全同窓会の先生方におかれましては、引き続きご指導ご鞭撻のほどよろしくお願ひ申し上げます。

## 退任挨拶

## 退任の「挨拶」

金沢大学医学系血管分子生物学分野(旧生化学第二講座) 山本 博



昨平成二十六年三月末日を以て金沢大学医学系血管分子生物学分野(旧生化学第二講座)教授を退任し、本年三月二日に最終講義を行いました。以下に最終講義要旨を掲げます。

## 最終講義題目「思来者―生化学徒としての歩みを顧みて」

かつてわがき日のわたしの眼に浮かんだ、おぼろな姿が、ふたたび影のように、揺れながら近づいてくる。今度こそ、おまえたちをしつかり捕えてみたい。わたしの心はなつかしい昔の夢にあためられる。ひしめきながら押しよせてくる姿よ、よし、そのままに霧や露のなかから立ちあらわれたい。おまえたちの群れをつむ魔法のいぶきが、わかかわしくわたしの胸をゆするかのようだ。(ゲーテ「ファウスト」より「捧げることは大山定一訳)

## 1. はじめに―初心

「ファウスト」を引用するのは、生化学教室に助手として赴任したときの挨拶状、生化学教科書の編者まえがきにつづき、三度目。確かなものを掴みたい、そういう想いが私を生化学に引き寄せ、また、つなぎ留めたように思われる。

## 2. 偉大なテーマ

動物にストレプトゾトシンを投与すると糖尿病になる。ところが、ニコチン酸アミドを併用投与すると糖尿病を免れ臍β細胞腫ができる。このメカニズムは何か?

というのが、一九七八年、恩師岡本宏先生から富山医科薬科大学で与えられたテーマであった。三年目位から手がかりが得られはじめ、臍ランゲルハンス島DNA鎖切断↓ポリADPリボース合成酵素活性化↓NAD枯渇↓β細胞死という一連の生化学的变化とポリADPリボース酵素阻害剤としてのニコチン酸アミドの役割を明らかにすることができた。

## 3. 進化を学ぶ

一九八五年、岡本先生とともに東北大学に移った。岡本先生は「コペルニクス、ガリレオ・ガリレイ、ニュートン、ダーウインを指す位の気概をもって研究せよ」と教え、これが東北大学医学化学教室のアトモスフィアとなった。この時期、ダーウイン「On the origin of species」に親しんだことは自然観形成のうえで重要であった。遺伝子の進化速度は機能的制約の程度によりドメイン毎に異なるという「遺伝子のモザイク進化」を明らかにした。

## 4. 新境地を

一九九〇年、本学生生化学第二教室を担当することとなった。新しい領域・課題に挑むことが若くして教授になったものの務めと考え、血管を新しい研究対象に選んだ。

## 5. 高血圧・血管新生・血液脳関門研究

内科学第二教室との共同研究で、血管自体がアルドステロンの合成系と反応系を併せもつことが明らかにされた。また、自然発症高血圧ラットで血圧上昇

とともに発現が誘導される新しい遺伝子cyr61を分離した。

各種血管新生促進・抑制因子による内皮細胞・周皮細胞増殖のオートクリン・パラクリン制御という血管新生制御の新機序を明らかにした。また、アンチセンスディスプレイという新しい機能性遺伝子スクリーニング技術を開発して血管新生に抑制的にはたらくp1c1という新しい遺伝子を分離した。

アストロサイトが内皮細胞に血液脳関門形質を賦与することを証明した。また、アミロイドβペプチドの脳移行が血液脳関門での輸送を担う受容体のテコイバリアントによって阻止されることを示した。

## 6. 糖尿病血管症の研究

糖尿病に特徴的な血管細胞変化を来す環境要因としてPAGE (Advanced Glycation End-products)、これに応答する細胞側因子としてRAGE (Receptor for AGE)を同定した。RAGEを過剰発現するマウスで糖尿病腎症・網膜症が増悪し、RAGEを欠くマウスは糖尿病腎症を発症しなかった。AGE-RAGE相互作用が2型糖尿病の進行に伴う臍β細胞不全に関わることも見出された。したがって、RAGEとそのリガンドは糖尿病の一次・二次・三次予防標的となると考えられ、このための戦略として、教室で発見された内在性テコイ受容体の産生誘導が考えられ、また、ヒトRAGE蛋白の三次元構造に基づく合理的創薬への道も開かれた。これらの研究成果により、日本糖尿病合併症学会Expert Investigator Award、日本糖尿病学会ハーゲドーン賞受賞の栄に浴した。過去・現在の教室員と共同研究者のお蔭であり、改めて深甚

の謝意を表したい。

## 7. 最近の新展開

教室の若い人たちの自由な発想によって、糖尿病における血管内皮前駆細胞の病態解明、スニクスモデルとした脂肪前駆細胞生成機構解明への再生医学・ゲノム科学的アプローチなど、研究は新たな展開を見せており、今後の発展が期待される。

## 8. おわりに

富山医科薬科大学赴任以来三十六年、金沢大学着任以来二十四年に亘る生化学徒の道は必ずしも平坦ではなかった。坂道や壁に遭遇したとき、支え乗り越える力を与えてくれたいくつかのことばがあった。「天職」(岡本宏先生)、「科學をすることがつまらなかつたら、何が面白いであらう」(大町文衛)、「胸を熱く、頭はクールに」(Lech Walesa)、「毎日サイエンティフィックに生きろ」(Robert A. Weinberg)等々。もともとよく元氣をもらったのは、常日頃の教室員との対話だった。述往事思来者(司馬遷)。このような生化学徒の歩みに些でも後進の参考となるところがあれば幸いである。浅学非才の身に生化学研究教育の職責を全うさせてくれたこれまでのすべての出会いに感謝し、最終講義の責めを塞ぎたい。

これまで同窓の諸兄弟姉から賜りましたご厚情に心より感謝申し上げます。なお、教授退任後は理事(国際・附属病院・同窓会担当)・副学長という新しい立場で金沢大学に奉職しております。微力ですが、大学の発展のため尽力して参る所存でございますので、ひきつづきどうぞよろしくご指導ご鞭撻ご交誼を賜りますようお願い申し上げます。

## 山本 博教授 退任記念講演会・記念式開催

平成二十七年三月二日(月)、金沢大学理事就任のため平成二十六年三月三十一日をもって医学系教授を退任された山本博教授の退任記念講演会および記念式がそれぞれ医学類G棟 第四講義室と附属病院宝ホールで開催されました。

記念講演会では、山本教授は「思来者―生化学徒としての歩みを顧みて」と題し、研究者、教育者として歩まれた道を振り返られました。多数の教職員、学生などが参加し、ご講演に耳を傾けました。山本教授は、岡本宏現東北大学名誉教授のもと、富山医科薬科大学医学部助手、東北大学医学部助教授を経て、平成二十年十月に金沢大学に着任するまでに、インスリン産生腫瘍ランゲルハンス島の変性・再生・がん化の分子機構に関する研究、ホルモン遺伝子の構造・発現・機能に関する研究に従事されました。金沢大学着任後は、血管障害、代謝疾患、がん及び神経疾患の発症機構について終末糖化産物(AGE)をはじめとする多様な生体内外の物質と結合し、様々な病態に関わるパターン認識受容体RAGEの構造・機能を中心に、生化学・細胞生物学・分子生

物学に渡る幅広い研究を展開されました。これらの一連の研究活動に対し、平成十九年に「糖尿病合併症におけるAGE/RAGEの意義に関する分子生物学的研究」において、日本糖尿病合併症学会からExpert Investigator Awardを、さらに平成二十六年には「糖尿病合併症の成因・病態・克服に関する基礎的研究」において、日本糖尿病学会から最高賞であるハーゲドーン賞を受賞されました。



教育面では、血管分子生物学研究分野(旧生化学第二講座)の教授として、学生、院生の教育にご尽力され、多くの優秀な人材を輩出されました。また、長きにわたリスキー部顧問も務められました。

大学の管理運営面においては、平成十六年八月から大学院医学系研究科長、平成十八年四月からは共同研究センター長、平成二十年四月からは初代の医薬保健研究域長、平成二十四年四月からは大学院医薬保健学総合研究科長の重職を歴任し、医薬保健研究域の礎を築かれました。また、平成十七年四月から医学部創立百五十周年記念事業実行委員、平成十九年五月からは編纂委員長として、創立百五十周年記念事業の遂行にご尽力されました。そして、平成二十六年四月からは、金沢大学理事(国際・附属病院・同窓会担当)・副学長に就任され、山崎学長の強いリーダーシップを支えておられます。

記念講演会にひきつづき、退任記念式が行われました。金子実行委員長の様子が写っています。

および記念品贈呈、山崎学長、岡本東北大学名誉教授の祝辞の後、山本教授からご挨拶がありました。つづいて、血管分子生物学教室を代表して新村祐子さんからの花束贈呈、医学部競技スキー部部长の生駒一平さんのスピーチがあり、中村信一十全同窓会長のご発声による乾杯の後、祝宴に移りました。名誉教授の先生方や同門、同僚の方々、関係者との交歓は尽きず、瞬く間にときが過ぎ、井関尚一医薬保健研究域長の万歳三唱で散会しました。

(医学系長 金子 周一 記)



## 同窓会名簿 本年12月上旬刊行予定

平成26年度、27年度会費納入の方に発送致します。

本号に会費払込用紙を同封いたしております。

## 井上正樹教授追悼

千葉大学生殖医学(産科婦人科学) 生水真紀夫



柿木晶で始まった金沢での六年間の学生生活を終え、大阪大学産婦人科で婦人科腫瘍医となりました。二度にわたるアメリカ留学で病理形態学の研鑽と見聞を積まりましたが、これからは「分子生物学」の時代になるとの確信を得て帰国されています。帰国後はHPVウイルスによる子宮頸癌発がん機構、子宮体癌の遺伝子異常についての研究を精力的に進められました。

金沢大学大学院医学系研究科分子移植学(産科婦人科学)教室の井上正樹名誉教授は、平成二十七年一月五日にご逝去されました(享年六十六歳)。井上教授は、昭和四十八年に金沢大学医学部を卒業になり、大阪大学産婦人科学教室で二十年あまりを過ごされた後に、平成六年に教授として金沢に戻られました。爾来、十八年を金沢大学の発展のために尽くされました。

先生は、兵庫県の丹波篠山の奥深い山村のお生まれで、「水道もなく十分な医療を受けられない環境」でお育ちになりました。小学校四年の時に五歳下の妹御を赤痢で失った体験から「病気を治せる医者になりたい」との思いで医師を目指されました。

平成六年十一月一日に金沢大学に十一代目の産婦人科教授として赴任されました。独創性originality、国際性internationality、人間性humanityの三つの基本理念のもと、明瞭な目標を示して民主的で透明性のある教室運営を始められました。コア診療研究グループを腫瘍と周産期とに再編して診療レベルの向上を目指し、複数に分かれていた同門会を一つに結集し再興して人事交流を円滑に行えるようにされました。さらに、北陸婦人科腫瘍グループ(北陸GOG)、北陸性感染症研究会、子宮頸がんゼロプロジェクトなどを次々と立ち上げ、石川県産婦人科学会・北陸生殖医学会・臨床細胞学会石川支部等の改革と活性化に邁進されました。また、産婦人科診療にとどまらず、十全医学会基礎臨床交流セミナーやNPO法人「周生期医療支援機

構」、周生期医療学寄付講座、補完代替医療学講座の新設にも取り組まれました。これらの力強い改革により整備された研究・診療・教育の基盤は、英文論文数の増加・競争的研究基金獲得額の増加、分娩数や手術件数の増加などに結実しました。子宮がん細胞増殖(テロメラゼ遺伝子のクロニング)やエストロゲン合成異常疾患(アロマターゼ遺伝子)研究では、海外からも高い評価を受けるようになりました。在任中の英文論文数は実に二百七十八編、文科省学術研究補助金獲得課題数は六十件に及びました。

井上教授の真骨頂は、「合理性」と「目利き」であったと思います。しきたりや慣習にとらわれることなく理性に照らしてすべての事柄を合理的に判断されました。「きわめて合理的な判断」はときに、伝統的な考え方とは相容れないことがあります。そのような状況でも、大勢に迎合することなく、堂々とご自分の考えを主張される姿に共感する学会員も多かったと思います。井上教授が教室を主宰された後半の十年余りは、産婦人科医療にとつて冬の時期でありました。医療訴訟や医療事故の増加、産婦人科医の減少などから、周産期医療の崩壊という言葉がマスコミで取り上げられました。そのような中で産婦人科学会は、医療施設の集約化により施設あたりの医師数を増やし、仕事の効率を高めて医師あたりの仕事を減らすことで乗り切ることを提唱しました。しかし、井上教授は、集約化が患者の利便性を低下させ疾病予後の悪化をもたらす可能性を指摘されました。現在では、この考え方が受け入れられ、地域の事情に配慮した集約化へと方向転

換が進んでいます。このような「目利き」の識見も、また時として大勢に受け入れられないこともあり苦労の種となりました。学問においても、玉石混濁の中から本物を見いだす「目利き」の仕事が、教授としての仕事であるという信念をもつて進まれました。

井上教授は、金沢での生活を楽しみ、金沢の街を心から愛でられました。日本婦人科腫瘍学会、性感染症学会、生殖医学学会、婦人科分子標的研究会など多くの学会を金沢で開催されましたが、参加者に金沢の町並み、伝統・文化・芸術を楽しんでもらうための企画をいつも心がけておられました。金沢城に菱櫓・五十軒長屋が再興されると学会懇親会の場に、しいのき迎賓館では北陸産婦人科学会を、能楽堂では婦人科腫瘍学会を開催されていきます。

平成二十四年の退任と同時に病を得て、病気療養中のところ去る本年一月にご逝去されました。井上教授の業績集の最後の頁に「旅立ちに 心残すや 寒椿」という句があります。金沢を離れるにあたり、金沢に残す思いが込められています。ご葬儀はご親族様により大阪で執り行われました。その後、平成二十七年三月二十九日にご家族様ご同席のもと金沢の地で、偲ぶ会が厳かに執り行われました。全国からも多くの方々に参列をいただきましたことを申し添えます。合掌。



# 十全同窓会の重鎮 寺畑喜朔博士を偲んで



先生は、昭和二年十月三十一日現高岡市伏木古府に生まる。昭和十五年小学校卒業・七年制の旧制富山高専学校尋常科に入学、同校高等科(理乙)を経て昭和二十二年官立金沢医科大学に入学、在学中より石丸解剖(解剖学第二)の門人となる。昭和二十六年大学卒業後には解剖学教室専攻生、昭和二十八年文部教官助手となり、本格的に解剖学の研究に従事、昭和三十年「腎上体の電子像に就て」の研究により医学博士の学位が授与された。昭和三十一年谷野内科(内科学第一)に入局、昭和三十二年厚生技官として国立金沢病院外科に勤務し、研究検査、司法解剖にも従事された。昭和四十九年金沢医科大学臨床病理学教授として赴任、同学の発展に貢献し、平成七年に退職さ

れた。その後、金沢医科大学名誉教授となり、介護老人保健施設おおぞらに勤務されていた。

平成二十六年一月に大腸がんがみつかり手術、その後順調な経過を辿っていたが、本年に入って下血し、平成二十七年二月二十一日不帰の人となる。享年八十六。

今日まで、先生は医史学研究者として後進の指導にあたられ、医学部記念各史誌の編纂に尽瘁された。また十全同窓会の理事として会報および名簿の編集を担当された。

生涯を通じての医史学の研究は昭和四十年代より継続されて、昭和四十六年『金沢大学医学部百年史』、平成五年『金沢大学医学部百年史以後三十年の歩み』、平成二十四年『金沢大学医学部創立百五十周年記念誌』の編纂に参画された。なかでも百五十周年記念誌発刊準備のための『覚え書』を、平成十三年から同二十四年の長期にわたり「同窓会会報」に連載されていた。お陰で記念事業の一環として、予定通り平成二十四年内に記念誌を上梓することができた。

また、かねてより本学に関連する一次史料の収集・保存に留意され、記念館資料室の充実にご貢献、平成二十一年に「収蔵展示品目録」第一版を刊行された。

尚、三年毎に定期的に出版されている「会員名簿」の作成にあたっては、清国留学生を含めた会員の動静調査に尽力され、また平成十二年度版では、前身校卒業生の姓名表記を「医学部生徒一覽」綴(記念館資料室蔵)に準拠して行うよう留意され、抜本的な校正がなされた。このように今日の同窓会の発展に寄与された先生のご遺徳を偲び、深甚の敬意と感謝の思いをこめて、ご冥福をお祈り申し上げます。

(理事 赤祖父 一知 記)



## お願い

学外の人事・消息・荣誉などの情報が十分に把握できないため、記事の掲載が時機を失し、大変失礼をいたしております。

今後とも叙勲、受賞、教授就任、都道府県医師会長就任などの情報を事務局あてお寄せ下さいます様、関係各位にお願い申し上げます。

十全同窓会会報編集委員会

# 創立百五十周年記念事業の進捗状況

## 百五十周年記念事業実行委員長・医学類長 多久和 陽

医学部創立百五十周年記念事業のうち残っている「医学部記念館の改修工事」と「メインプロムナードの整備事業」の二つの事業(図1)の進捗状況についてご報告します。本宝町キャンパス整備

二億円と皆さまから賜った百五十周年記念事業募金と十全同窓会からのご寄付を合わせた一億円の、合計約三億円が充てられています。まず医学部記念館の建物本体の改修は既に終了しています。一階の展示室および二階の多目的ホールは全面的に内装を一新し、建物全体を耐震補強しました。展示室は、天井・壁面はシックな黒色調とし、床面は柔らかいベージュの色調とし、照明は紫外線の少ないLEDダウンライトとスポットライトを備え、現代的な展示室に生まれ変わります。展示は、明治以来の多数の貴重な資料の中から、十全同窓会や金沢大学資料館を初めとする関係機関からご意見を頂戴して展示物を厳選し、わかりやすい展示とすることを心掛けます。貴重な資料を活用することにより、伝統と歴史の中から医学者としての心構えや研究の大切さを伝え、深

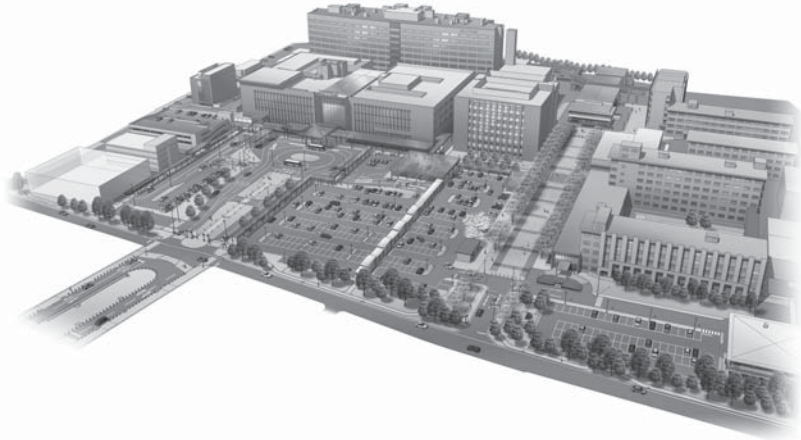


図1 完成予想キャンパス図

く考えるための教育の場となるように意図したいと考えています。これに合わせて老朽化していた展示室内のショーケースを一新することとし、これにかかる約二千万円の費用も十全同窓会からご寄附をいただきました。展示できない収蔵品は、収蔵庫(展示室の隣室)に収め、収蔵品リストに追補して収蔵品の確定に努めます。医学部記念館では、この他に一階と二階に、学生・若手教員用の教育研究スペースを計三室新設しました。本年七月の十全同窓会総会の際に、会員の皆様に医学部記念館をご覧いただくことを予定しております。

メインプロムナードの整備事業は、現在急ピッチで進んでいます。十全講堂から医学部正門に向かう現在の樺並木の自動車道は、車両を完全に排除した幅広い歩行者専用の遊歩道となります。この遊歩道は、メモリアルプロムナード「医学の道」として、宝町キャンパスのシンボリックな景観となります。プロムナード



写真1 市道側から見た工事中の新正門付近



写真2 十全講堂前の舗装道路

は十全講堂玄関から市道の方向に向かって真つすぐに伸びますので、正門の位置は現在の位置より病院側に二〇〜三〇メートル移動します(写真1)。プロムナード、十全講堂周辺および医学部記念館周囲は、すべて擬石平板で道路表面を舗装します(写真2)。病院エリアも同様の擬石平板を用いた舗装がなされ、樺並木とともに宝町キャンパスに風格ある景観を与えます。正門については、現存の医学部正門門柱は、明治期の外側門柱と想定されます。年数を経ているために構造上の強度が十分でないことが調査でわかりましたので、新しい位置に移して継続使用することは難しく、明治期の正門の意匠をもとに新たに正門を建設する予定です。現在の正門門柱は、新正門の近くに保存する方向で検討を進めています。メインプロムナード整備事業は、本年九月に竣工予定です。

医学部記念館の改修工事、プロムナード整備事業と合わせて、金沢市による医

## 「第三の道」医療革新を専門とする医師の養成 第二回シンポジウムの報告

平成二十五年度に文部科学省未来医療研究人材養成拠点形成事業として本学が採択された「第三の道」医療革新を専門とする医師の養成」の第二回シンポジウムが、平成二十七年二月二十七日（金）、附属病院宝ホールにおいて開催されました。

事業推進責任者の井関尚一医薬保健研究域長による開会の辞、病院・国際担当の山本博理事による挨拶に続き、専任教員である米田隆特任准教授が本事業の現状説明を行い、本学のメディカル・イノベーションコースの強みが実践英語力の育成とレギュラトリサイエンス教育にあること等を述べました。

続いて、専任教員である原章規特任准教授の座長のもと、日本医療政策機構の宮田俊男氏による「安倍政権下の臨床研究改革と金沢大学に期待するリーダーシップについて」と題した特別講演がありました。宮田氏は、心臓外科医出身で、厚労省において薬事法改正や再生医療法の制定に尽力し、その後内閣官房健康医療戦略室戦略推進補佐官として、日本医療開発研究機構（AMED）の立ち上げにも関わりました。講演においては、レギュラトリサイエンスの意義、日本の医薬品開発の現状、医療と医療産業活性化における行政の役割、高度医療評価制度制定の経緯、医師と企業との利益相反、医師主導治験の推進、臨床研究中核病院の役割、AMEDの役割、混合診療

の推進、地域包括ケアシステムの構築など、多岐にわたり臨床研究のあり方を中心に日本の医療政策の方向について述べられました。

その後、「北陸を中心とした産学官連携による医療分野の研究開発の展望」と題したパネルディスカッションに移り、絹谷清剛プログラムマネージャメント室長の司会のもと、パネラーとして官代表の宮田氏の他、産を代表して丹野博氏（株式会社キュービクス代表取締役社長）と牛島ひろみ氏（有限会社バイオデバイステクノロジータ取締役・企画部長）、本学



学部・病院前の用水沿い遊歩道の整備が予定されています。整備は複数年度にわたり、病院側から着工されます。現存のレンガウォールは、明治四十五年に金沢医学専門学校が移転新築された時のものと判断されます。レンガウォールは百年以上にわたり地域で親しまれた景観ですので、できる限りこれを残す意匠とする方向です。

を代表して三邊義雄教授と村山敏典教授が登壇しました。第一に医療開発の事例紹介、第二に医療開発における課題、第三に知財戦略の展望というテーマで議論が行われ、産学官連携や異分野連携の必要性、産学規制当局と議論できる知識の必要性、短期間でシーズを実用化する必要性、国が規制ルールを改正して医療開発の進展につなげる必要性、大学が知財の面での支援体制を充実させ、学生時代から知財や臨床試験の意義について教育し、教員評価で知財の獲得を重視すべきこと、特許は無駄を排して戦略的に取るべきことなどの発言がありました。最後に金子周一医薬保健学総合研究科長が閉会の辞を述べました。

昨年のキックオフシンポジウムでは研究内容の発表が中心でしたが、今回は製品開発や臨床研究の話題が中心で、参加者は百名を数えました。これを期に、「メディカル・イノベーションコース」ならびに今年度から始まる「社会人インテンシブコース」に多くの皆様が参加し、レギュラトリサイエンスを学んで医療革新に結びつけていただくことを願っています。

（井関 尚一 記）

記念事業実行委員長として、記念事業の最終段階に入ることをご報告できることを、心から喜んでおります。これもひとえに、十全同窓会会員各位のお力添えの賜です。十全同窓会会員の皆様に深甚の感謝を申し上げますとともに、創立百五十周年記念事業が有終の美を飾る日を、楽しみに待ちたいと存じます。

### 悪質な電話にご注意下さい

ここ数年、同窓会の名前や事務局員の名前を語り、会員の住所を聞きだすケースが増えています。不審な場合は必ず事務局までお電話の上、ご確認下さいますようお願い致します。

十全同窓会事務局 電話：076-265-2132

## 第一〇三回日本泌尿器科学会総会報告



平成二十七年四月十八日～二十一日の四日間、第一〇三回日本泌尿器科学会総会を開催させていただきました。会場は受付のもてなしドーム地下広場から繋がる石川県立音楽堂、ANAクラウンプラザホテル金沢、ホテル日航金沢、金沢アートホール、金沢都ホテル、ホテル金沢で、まさに金沢駅前が学会コンプレックス(複合施設)のようになりました。

を超える方々が金沢にお越しいただきました。金沢での日本泌尿器科学会総会は平成三年(久住治男先生)以来で、教室内一同準備に追われてきましたが、大きなイベントをお世話させていただきました喜びもありました。総演題数は二千四百五十と過去最大となり、感謝の気持ちで一杯です。また、JUA Internationalと称する国際のUnionを新設し、若手泌尿器科医が英語で討議する場を設けたところ、百三十七(うち海外から百)もの演題をいただき、多少なりとも総会の国際化に貢献できたこと嬉しく思います。

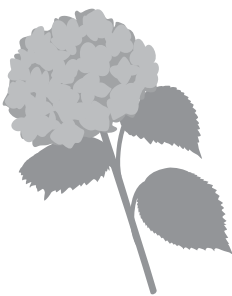
第一〇三回総会のテーマは「Imagine Future Urology, Believe in Your Dreams!」にさせていただきますました。その意味は、未来の泌尿器科、未来の泌尿器科医としての自分をイメージしよう。そして、その未来、夢を信じて頑張っていくという、主に若手医師へのメッセージでした。

今回の目玉として、若手医師がプログラムを作成した「夢を信じて、未来の泌尿器科を語ろう」と、若手医師が手本としていただいた泌尿器科の歴史を築いてこられた偉大な先達によるLegend's Lecture、その分野の巨匠と言われるエキスパートによるMaster Lectureを企画しました。また今回力を入れた教育企画の中で、「泌

尿器癌手術における他科との連携」、「泌尿器疾患の画像診断を極める」、「癌診療におけるBad Newsの伝え方」、「泌尿器がん薬物療法において知っておきたい支持療法」の箇所には金沢大学附属病院および関連病院から多くの先生方にご講演いただき大変好評でした。誌面をお借りして厚く御礼申し上げます。

さて、学術のみならず、おもてなしとして様々な催しも行いました。会長招宴での芸妓さんの素囃子、オーケストラアンサンブル金沢による本格的な演奏会、金沢城公園での総懇親会での炎太鼓演奏、金沢市消防団五十名以上による加賀鳶演技(写真)など、金沢の伝統・芸術を満喫していただきました。第一〇三回日本泌尿器科学会総会が、泌尿器科学の更なる発展に貢献できたこと教室員の無上の喜びです。

最後になりましたが、ご多忙中お越しいただきました中村信二十全同窓会長、山崎光悦学長、山本博理事はじめ、十全同窓会員に厚く御礼申し上げます。  
(並木 幹夫 記)



### 名簿改訂についてのお願い

編集委員会では、各卒業年度からの協力者を中心として複数の方に住所変更の校正作業をお願いし、遺漏のないように努力いたします。何分多数、多岐に亘る作業ですのでご協力の程宜しくお願いいたします。

なお、改訂版の発送は十二月上旬を予定いたしております。

十全同窓会名簿編集委員長 大井 章史

## 病院紹介

### 公立宇出津総合病院

(はじめに)

公立宇出津総合病院は、昭和二十一年十月日本医療団宇出津病院として、能登半島の北東部に位置する能都町の宇出津地内に開設されました。能都町の海岸線は大半が能登半島国定公園に含まれていて、晴れた日には、当院の病棟からも北アルプスの嶺々が遠望される風光明媚なところです。地域医療を担う総合病院として、都市圏から遠く離れていても、可能な限り格差のない医療の提供が当院の使命と考え、取り組んできました。

当院は、昭和二十七年に病床数九十床、内科・外科・小児科・産婦人科・耳鼻咽喉科・眼科の診療科で、組合立の総合的な病院としての態勢を整えました。その後、平成三年に全面改築を行い、一般病床を百八十八床に増床し、診療科も十七科となりました。平成十七年三月に能都町・柳田村・内浦町の町村合併により、組合立から町立の国保直営診療施設、自治体病院施設となり、平成二十一年には、病床数を百二十床として、きめ細かな医療サービスを提供できる態勢となりました。常勤医師は十三名で、現在、金沢大学からは、内科・外科に常勤の医師を、耳鼻咽喉科・脳神経外科には非常勤の医師を派遣していただいております。

(基本方針、指針)

当院は基本理念として、「笑顔で心の

こもった良質な医療サービスの提供」を掲げており、同じく指針として、「地域住民の人々に信頼される病院を目指します」「よりよい接遇と思いやりのある病院を目指します」「質の高い医療を提供できる病院を目指します」の三つの目標を掲げ、地域から愛される病院となれるよう努力しています。

(公立宇出津総合病院の目指す医療)

石川県では、高齢化が進行する中、疾病の予防や早期発見はもとより、診断・治療からリハビリテーション、在宅での療養に至るまで、適切な医療提供体制の確保を目指し、第六次石川県医療計画が平成二十五年四月からスタートしました。能登北部の地域医療、とりわけ急性期医療を担う機関として、隣接する医療圏の医療機関との連携が欠かせません。

救急外来施設及び高度医療機器の利用促進や救急隊との連携強化、診療所・介護施設との連携強化はもとより、重篤な救急患者（三次）や専門的な治療を要する救急患者については、七尾市二病院や石川中央医療圏の三次救急医療機関等と連携して対応しています。また、能登地域では、救急患者の円滑な受入、転院搬送を行うため、能登北部医療圏の四つの救急告示病院と、七尾市二病院の間でスマートフォンを用いた脳卒中の遠隔画像伝送システムが運用されています。がん医療については、標準的ながん診療はもとより、進行がん・再発がん患者に対する緩和ケアにも取り組んでいます。平成二十六年十二月には、外科外来を増築し、これまで石川中央医療圏まで長時間移動を伴って受けていた化学療法を地元で

きる環境を整え、患者負担を軽減しました。医療サービス推進室では、医療ソーシャルワーカー、保健師、診療情報管理士、訪問看護師が常駐し、入院院支援、療養支援や医療相談を行っています。

また、病院経営の健全化を推進するため、職員の意識改革にも取り組んでいます。病院長の医局員への指導体制の充実、各科症例検討会及び医師会合同症例検討会の開催、目標管理・意識改革を目的とした各部門ミーティングの実施、職員研修機会の充実などの実施と共に、経営状況の共通認識を図る情報発信も行っています。

また、職員間の連帯感・コミュニケーションを深めるために、互助会活動の充実（国保直営病院体育大会、宇出津灯りフェスティバルへの参加、旅行、忘年会など）に取り組んでいます。また、「地域の皆さんに当院の事をもっと知っていただきたい」「信頼され、愛される病院でありたい」という思いから年二回の病院フェスタを開催し、入院・外来患者やそのご家族とのコミュニケーションを高めると共に、地元の中学校・高等学校の看護体験の受入や看護師が講師として学校に出向き、看護の魅力を紹介しています。

当院は、急性期医療及び二次救急医療を提供する中核病院として、その役割の一端を担ってきており、今後も地域に密着し、その意向や要望を反映した医療サービスを行うことで地域の皆さんの健康の増進に貢献することが使命であると考えています。

(院長 滝川 豊 記)



病院紹介

富山県厚生農業協同組合連合会  
滑川病院

三月から解禁となり、幻想的な光を放つ『ほたるいか』は富山湾の深海に住む鳥賊です。三月以降、産卵のため湾の浅層に上がってきたところを、産卵後捕獲します。この『ほたるいか』で有名になった富山県滑川市に当院はあります。滑川市は富山市の東に位置し、人口三万三千人ほどの小さな市であります。滑川市には公立病院はなく、唯一当院が公的病院として市民病院的な役割を担っており、一次・二次救急指定病院として機能し、また予防医学の重要性から健康管理運営を行う「健康管理センター」も有しております。医療圏は富山医療圏に属し、近隣の富山県立中央病院や富山市民病院まで救急車で二十五分程度の位置にあり、富山市の水橋地区、魚津市の一部を含めて八万人程度の人口をカバーしている現状です。

当院は、昭和二十年七月「富山県農業会第二病院」として開院し、昭和二十三年八月に富山県文化厚生農業協同組合連合会滑川病院、昭和二十六年四月には農協滑川病院に改称、昭和五十年四月からは、より地域住民に沿った医療提供ができるよう「富山県厚生農業協同組合連合会滑川病院（厚生連滑川病院）」に改名され現在に至っています。現在は内科、精神科、神経内科、小児科、外科、胃腸科、整形外科、脳神経外科、皮膚科、泌尿器科、



産婦人科、眼科、耳鼻咽喉科、放射線科、麻酔科、リハビリテーション科の十六科を有し、一般急性期病床百五十八床、地域包括ケア病床五十三床、精神科病床六十八床、計二百七十九床で稼働しております。常勤医師は小生を含めて二十六名で内科六名、整形外科・リハビリテーション科六名、外科三名、胃腸科一名（検診・内視鏡専属）、精神科二名、眼科一名、皮膚科一名、放射線科一名、麻酔科一名、神経内科一名、産婦人科一名、脳神経外科一名、泌尿器科一名、小児科は日替わりでの連日、耳鼻咽喉科は週二日の非常勤体制となっております。金沢大学から内科、外科、整形外科、眼科、皮膚科、放射線科、泌尿器科、小児科、核医学診療科から派遣していただいております。他は富山大学からの応援態勢を取っています。当院も他の公的病院と同様に医師不足・看護師不足に陥っているのが現状で、結果として病院経営にも影響を与えている状態です。

本来病院の使命としては、地域住民に對しての救急医療、及び先進・高度医療の提供と考えております。滑川市も高齢者が多く、夜間の救急患者さんのほとんどが内科的疾患です。内科医師の充実が最重要課題ですが、なかなかうまくいかないのが現実です。残念なことに本年四月からは、第三内科の撤退もあり呼吸器内科医師の確保に四苦八苦し、その分現在の内科医師には負担がかかりすぎ過ぎ重労働を強いられています。幸いなことに第一内科からは若手医師の派遣もあり、当院の先生方は不満なく仕事をこなしていただいております。しかし、これは医療安全面からもミスにつながりやすく早急に改善を要する課題と思っております。また近年増加している高齢者の外傷・骨折・変性疾患については整形外科からの援助もあり整形外科医六人態勢にてカバーしている状態です。

ここでみなさんに、当院ならではの話題をひとつお話ししたいと存じます。実は滑川病院の外來棟一階、中庭に泉が湧いております。この泉には次のような由来があります。「昔々、安土桃山時代、美作の国、現在の岡山県の人で名を了安と、その子安静十五歳がおりました。二人は巡礼の旅に出て途中、滑川宿にて父了安が病に臥し死に臨み、京都清水寺の音羽の水を懇願いたしました。息子安静は昼夜をかけて京都に向かい、その水を持って滑川へと戻ってきましたが、すでに父は息を引き取った後でした。安静は泣きながらその清水寺の水を墳墓に注ぐと、たちまちにして水が湧いてきたのです。のちにその孝を称えてこの泉を孝徳泉と名付けられました。」滑川病院は

平成十七年三月に外來棟・手術室・健康管理センター等を中心とした病院の改築が行われましたが、中庭の孝徳泉は畏敬の念からその泉を残し、今日に至っております。外來の待合室からその景色を拝むことができます。このような縁から何と今でも京都清水寺の貫主、森清範様（毎年年末にその年を表す一文字の漢字をしたためられる方です）が毎夏、今年六月七日に、この孝徳泉にお参りに来られます（写真）。今年は二十周年の記念の年であり、森貫主様には、直々に一文字書いていただくことになっております。滑川病院の宝の一つであります。ぜひ十全同窓会の先生方も一度当院を訪れた時には孝徳泉をご覧になってはいかがでしょうか。もしかすると靈験あらたかなことが起こるかもしれません。

（院長 南里 泰弘 記）



## 教室だより

### 感覚運動病態学

沿革

明治三十六年二月に金沢病院（現在の附属病院の前身）の職制改革が行われ、このとき外科部から独立して耳鼻咽喉科ができ、金沢医学専門学校（旧制金沢医科大学の前身）の宮田篤郎が第二外科部長との兼任で耳鼻咽喉科長を務めました。実際のところは、明治二十五年発行の金沢医学会雑誌第四卷三十三号に「耳科の独立。（中略）外科より分離せり。」との一文があり、十年前より独立が模索されていたようです。耳鼻咽喉科診療開始の四年後、明治四十年に官立医学専門学校規程により科目中に耳鼻咽喉科が制定され、翌

年九月十一日、金沢医学専門学校（旧制金沢医科大学の前身）にも初めて耳鼻咽喉科学が学科中に規定され、専門講座として誕生するに至っています。明治三十六年に初代教授として宮田篤郎が着任して以降、佐崎伊久、久保護躬、山川強四郎、松田龍一、豊田文一、梅田



良三、古川 仰が教授を歴任し、平成二十年十一月に吉崎智一講師が九代目教授に昇任しています。

### 教室の理念

教室の基本理念は「人を育てることはすなわち己を育てることである」です。医学には、字面のみの学習・教育では収まりきらず、人間関係を通してでないと伝わりにくいことが多々あります。自分が見たことを多少経験の肉付けをして後輩に伝えるばかりでなく、後輩から教えてもらうこともあります。互いに仲間を育てていると同時に自分も育ててもらっているのが私たちの集団であり、「教える」と「とまらず」「育てる」を意識しています。

### 教育

医学類教育では、吉崎教授の頭頸部腫瘍総論・各論をはじめ、助教以上のスタッフらがサブスペシャリティをいかにして耳鼻咽喉科学系統講義（脳神経・感覚器）を担当しています。BSLには若手医師による「耳鼻咽喉科診察の仕方」から吉崎教授のレクチャーにいたるまで、教室員が一丸となつて対応しています。

卒後教育では、単なるマニュアル職人や技術屋と化さぬよう、リサーチマインドの育成に重点を置いています。毎朝のカンファレンスや週一回の定例医局会は、その鍛錬の場でもあります。この姿勢は、将来耳鼻咽喉科を選択しない初期研修医に対しても同様で、大学全体さらには北陸地域の研修をよくするという大局観にたつて努力を注いでいます。フィジシャン・サイエンティ

ストとして活躍できるよう、早期からの大学院入学を積極的に推進しています。大学院四年次を臨床フリーとする方針であり、研究に専念できると好評です。

### 臨床

当教室では、耳鼻咽喉・頭頸部領域を網羅したサブスペシャリティによる専門医療を行っています。頭頸部癌に対する集学的治療や、境界領域における疾患では、他科との連携を積極的に進めています。

入院患者で最も多いのは頭頸部癌です。エビデンスに基づいた一般的な治療に加えて、化学放射線療法における超選択的動注化学療法を早期から取り入れたことが特色です。また、QOLの評価と改善するための方策に関する臨床研究も先駆けて開始しています。一方、欧米で注目されている経口のロボット手術を見据え、経口的咽喉頭腫瘍摘出術にも精力的に取り組んでいます。

耳科では、難易度の高い鼓室形成術症例が多く紹介され、北陸最後の砦を自負しています。人工内耳埋め込み術の実績も豊富であり、最近では外側頭蓋底手術への取り組みも評価されています。鼻科では、鼻内視鏡手術の適応を広げつつ、当教室伝統の嗅覚障害にも力を入れていきます。喉頭科では、難治性疾患である再発性喉頭乳頭腫に対して抗ウイルス薬を用いるユニークな治療を行っており、全国から患者の紹介を受けています。

### 研究

サイエンティフィック・アイを持った臨床医を育成するため、研究にも重きを置いています。主な研究分野は、腫瘍、免疫、神経に大別されますが、実際は相互に関わる研究が少なくありません。

腫瘍分野では、エプスタイン・バーウイルス（EBウイルス）と上咽頭癌の研究に三十余年にわたり取り組んで来ています。EBウイルスが発見されてから五十年ですが、上咽頭癌の高転移性をEBウイルス癌蛋白から切り込んだ研究はウイルス学的にも斬新で、高い評価を得ています。さらに、転移の視点からはリンパ管新生へと研究を進展させるとともに、EBウイルスに着目した治療の開発も試みています。「ウイルスと腫瘍」の視点では、ヒトパピローマウイルスが関与する再発性喉頭乳頭腫に対する新規薬物治療の探索を精力的に行っています。さらに医工連携により、ナノテクノロジーを用いた新規抗癌剤の基礎的研究を臨床応用も視野に入れて遂行しています。

免疫分野では、分子遺伝学教室とも連携し、ヒトパピローマウイルス関連中咽頭癌の発癌メカニズムの解明に取り組んでいます。また、臓器機能制御学教室とも連携し、IGG4関連疾患に伴う嗅覚障害の解明やIGG4関連疾患としての唾液腺腫瘍に関する研究を行っています。さらに、上気道における粘膜免疫の研究に着手しています。

神経分野では、聴覚中枢の発生に関する研究を二十年余にわたり継続し、実績をあげています。

### おわりに

吉崎教授の就任後六年が過ぎ、黎明期から発展期へと移ってきました。当教室がどのように発展していくのか全国から眼が向けられることを意識して、教室員一同、教育臨床研究に邁進する所存です。今後とも十全同窓会の皆様のご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願ひ申し上げます。（室野 重之 記）

## 教室だより



## 脳細胞遺伝子学

## 沿革

神経情報研究施設の開設十年が経過した昭和五十一年に第二番目の部門として神経物性研究部門が発足した。初代教授として、第一解剖学教室で研究を続けてきた中村俊雄助教が昇任した。体調不良のために中村俊雄教授は定年を前に昭和六十二年に退任した。後任にはがん研究所薬理部の東田陽博助教が第二代教授に就任した。東田陽博教授はイオンチャネルの活性制御機構やCD38によるオキシトシン放出制御を解明するなど大きな功績を挙げた。平成十年四月には重点化大学院の一部門として細胞遺伝子学教室に変更された。平成十三年四月には医学部の大学院部局化に伴い脳細胞遺伝子学研

究分野に改編された。東田陽博教授は平成二十四年に定年を迎えたが、その後も子供のころの発達研究センター・連合小児発達学研究所へ移動し活発な研究を継続している。平成二十五年一月に東京大学大学院医学系研究科の河崎洋志特任准教授が第三代教授に着任した。

## 研究内容

河崎教授の神経内科での臨床診療経験に基づき、基礎と臨床との融合的研究を心がけている。具体的には「脳神経系の発達と異常の解明およびその医学的応用」を柱に据えている。これまでに、まず胚性幹細胞（ES細胞）から選択的に神経細胞を試験管内で分化誘導し作成する方法（SDIA法）の開発に成功した。さらにSDIA法を用いてドーパミン作動性神経細胞や網膜色素上皮細胞などの有用細胞を試験管内で作成することに世界で初めて成功した。このSDIA法はiPS細胞からの有用細胞の作成のために山中伸弥教授も使用しており、現在、世界に先駆けて理化学研究所や京都大学再生医学研究所で国家プロジェクトとして進められている加齢黄斑変性やパーキンソン病へのiPS細胞を用いた再生医療の端緒となった。

また現在、医学研究に用いられているマウスの脳はヒトの脳よりも小さく原始的である。例えば、ヒトの脳の表面にはシワ（脳回）が存在するがマウスの脳には存在せず、従って脳回異常の解析はマウスでは困難である。そこで、よりヒトに近い脳神経系を用いた病態解析や遺伝学的解析が今後重要になるとの視点から、高等哺乳動物フレットに着目し高等哺乳動物の脳神経系への遺伝子導入法

を確立した。現在、世界各国の研究室でこの方法を用いた病態解析や脳神経系の形成過程解析が行われている。マーモセットなど高等哺乳動物を用いた研究は注目を集めているが、当教室ではフレットを切り口に高等哺乳動物の脳神経系の解析を行っている。

脳神経系に影響を及ぼす環境要因の解明は重要な脳神経医学的研究課題である。母親から生まれ出ること、即ち「出生」は生涯において最も劇的な環境変化であるが、出生が脳神経系の発達に及ぼす影響はほとんど注目されてこなかったことから、出生に着目した研究を行った。その結果、出生が脳神経系の発達を促すスイッチであり、その下流に神経伝達物質セロトニンが位置することを発見した。著しい早産では発達障害や精神疾患の発症リスクが高くなるが、その病態は不明であり、本研究成果がこのような疾患の病態解明に繋がることが期待される。

## 教室の運営方針

教授以下スタッフ三名、大学院生四名、医学類生七名で研究を行っている。さらに臨床系教室との交流も積極的に行い臨床系教室より四名を受け入れている。

第一の運営方針は「楽しむ」である。研究とは本来楽しいものである。日常において自ら思いついた様々な疑問を、自ら解き明かすことはとても楽しい。新たな仮説が思いついたとき、仮説の正しさが実験で証明されたときの興奮を抑えきれない。顕微鏡をのぞくとき、世界の誰も知らない新しい事実が見つかる可能性が常にある。自らの研究成果が将来的に疾患病態の理解や多くの患者さんの治療に結びつくことを想像するだけでワクワク

クする。この「ワクワク感」を共有したい。

第二の運営方針は「仲間」である。基礎系、臨床系や医学類生などの枠を超えた多様な仲間が集う場を提供する。共通の目標を目指し切磋琢磨する中で作られる信頼関係は、教室から離れたあともお互いに助け合い刺激しあう関係に繋がります。お互いに建設的な批判のできる仲間を作る。また国内外より講師を積極的に招聘し、教室を起点とした豊かな人間関係の構築を目指す。河原でのバーベキュー、花見、飲み会など様々なイベントも積極的に行っている（写真参照）。

第三の運営方針は「育成」である。教室を卒業するまでに独立して自律的に教育や研究を行う能力の育成を目指す。医学類教育では知識の習得に重点が置かれ、実験はもちろん発想法、論理思考法、論述法、プレゼン法、医学英語などの習得はあまり行われていない。これらの技術的習得を目指し個別トレーニングを行っている。

第四の運営方針は「独自性」である。受動的ではなく自らが主体的にプロジェクトの方向性を考える独自性を尊重している。

## おわりに

金沢に着任させて頂き二年余りが経過した。これまで多くの先生方から篤いご支援を拜受し、多数の優れた指導者、友人や大学院生に助けられてきた。皆様のご温情に改めて深く感謝を致します。今後は本学の創立百五十周年の燦然たる歴史に些かなりとも残る貢献を目指したく、十全同窓会の諸先生方のご高導とご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。（河崎 洋志 記）



## 支部だより

### 三重支部

平成二十六年度十全同窓会三重支部会  
 総会は、平成二十七年二月十五日(日)  
 に三重県津市の料亭「はま作」で行われ  
 ました。本年度総会には十一人の会員  
 が出席しました(昨年十一名)。三重支  
 部では、支部長原田資先生(昭和四十  
 六年卒業)のもと、今回の総会も、和やか  
 に進行していきました。(近藤峰生先生  
 (平成三年卒業)、東谷光庸春先生(平  
 成十三年卒業)は、ご用事のため欠席と  
 なりましたが、来年はご参加頂ける事を



願っています。現在の三重支部の会員は  
 二十三名です。)

会計報告の後、今年の金沢大学の医師  
 国家試験の合格率のお話や、原田先生が、  
 特別講演に出席された時のお話を伺いま  
 した。毎回、アカンサスを配られ、現在  
 の金沢大学の近況なども聞け、大変興味  
 深かったです。また、これまで長きに渡  
 り三重支部を支えて頂いた山門亨一郎先  
 生(昭和六十二年卒業)が、兵庫医科大  
 に移られたとの事で、何年か後にまたお  
 会いできるのを、先生がた全員が心待ち  
 にされていきました。その後は、いつも  
 ように、懇談会に移りました。懇談会で  
 は生駒一徹先生(昭和二十一年卒業)が、  
 御年九十三歳になられて、今も現役で活  
 躍されていることに、先生がた全てが感  
 動されていました。私も、生駒先生を見  
 習って、これまで以上に、臨床に励みた  
 いと思いました。そして、懇談会も和や  
 かな雰囲気うちに終わり、閉会となり  
 ました。また、来年の同窓会も楽しみに  
 しています。今回参加できなかった先生  
 がたも、是非、ご出席をお待ちしてい  
 ます。

(黒川 義博 記)

写真

後列左から・春木祐司(平成十七年卒業)、  
 森一満(昭和五十一年卒業)、野口孝(特  
 別会員)、中瀬玲子(昭和六十二年卒業)、  
 伊藤敏秋(昭和五十二年卒業)、黒川義  
 博(平成二十一年卒業)、大石晃嗣(昭  
 和六十三年卒業)  
 前列左から・祖父江直久(昭和五十一年  
 卒業)、水本龍二(昭和三十年卒業)、生  
 駒一徹(昭和二十二年卒業)、原田資(昭  
 和四十六年卒業)(支部長)(敬称略)

### 秋田支部

五月九日、前回の支部総会がいつだっ  
 たのかも忘れるほど、何年振りの集まり  
 で県医師会名簿を頼りにやっと三人の新  
 会員を見つけ、今までの四人に加え女性  
 会員がいることがわかり合計八人なり今  
 回の参加は五人だったがなんとか支部存  
 続は出来そうである。寺邑能實(昭和  
 三十八年卒業) 武田忠厚(昭和三十八年  
 卒業) 猪股茂樹(昭和五十一年卒業) 石  
 田恭央(平成六年卒業) 加藤倫紀(平成  
 七年卒業)の五人が参加し品川利夫(昭  
 和四十八年卒業) 加藤佳子(平成七年卒  
 業倫紀さん夫人) 湯本聡(平成八年卒業)  
 の三人が不参加だった。金大から秋田第  
 三内科助教になった中本先生(昭和



三十七年卒業) の金沢弁の思い出や武田  
 君と高校、大学と同期だった第一病理教  
 授から医学部長になった中西功夫先生  
 が秋田県人会を開いてくれた事など楽  
 しいひと時だった。武田君はいつもなが  
 らダンデーな精神病学者で造詣が深く、  
 猪俣君は糖尿病専門でその他、秋大医局  
 の事も詳しく、加藤君は温厚でしかも奥  
 さんが神経内科でこれからの秋田県の  
 精神科臨床分野で益々活躍しそうだ。石  
 田君は体格も立派だが大館市での脳神  
 経外科クリニックを中心に青森県にも  
 在宅診療をしているタフガイだ。県内  
 に十四名の物故会員がいたが自分はま  
 だ仲間入りしないように老健と病院を  
 やるしかない。

(支部長 寺邑 能實 記)



## クラス会

卒業後二十周年同窓会の報告  
(平成六年卒業)

平成六年金沢大学医学部卒業の同窓会は、卒業後概ね二十年の節目を迎えたのを機に、本年三月七日(土)十九時からJR金沢駅前の「金沢茶屋」で行われました。

そもそも開催のきっかけは、同級生の教授就任のニュースが昨年从今年にかけて相次いだことでした。菊知充君(金沢大学子どもこころの発達研究センター特任教授)、中田光俊君(金沢大学医薬保健研究域医学系脳・脊髄機能制御学(脳神経外科学)教授)、若山友彦君(熊本大学大学院生命科学研究部生体微細構築学分野教授)(就任順、以下敬称略)の就任記事が十全同窓会報にも掲載されるといふ大変喜ばしいこともあり、これを同窓会で祝わない手はない!といった調子で、絶好の同窓会開催の機会を得たのです。

北陸新幹線開業の一週間前で金沢に全国的な注目が集まる中、何とかみんなが集まっても狭くないような会場をおさえないと考へ、十全同窓会報編集副委員長がかつ金沢大学の准教授であった若山友彦の後方支援をうけつつ、地元で開業している比較的時間の融通の利きやすい宮内修と日頃からプチ同窓会に集まってくる山城輝久、安間圭一に声をかけ、Facebookや大学内のメール等のネットワークを利用して、みんなの都合が最も良いと思われる日時に決定しました。また、この機会に同窓会名簿も充実させたなどの考へもあり、濱口えりか・笠島里美などが我々男性陣よりある意味パワフル

ルに活動して同級生各氏の情報特定に奔走した甲斐もあって、当初は一学年定員百名中の三分の一も集まるかと考えていた会の出席者は六十名近くにのぼりました。

さて、当日自分のクリニックの外来をかたづけて会場へ着くと、十八時三十分には幹事五名プラス湊屋剛だけという状況で、果たしてみんなちゃんと来てくれるのか、会計責任者としては少し血圧の上がる思いでした。しかし、ほどなく会場のある二階のエレベーターの扉が開くたびにどつと懐かしい面々が登場し、名簿の記入、会費の支払・首から下げるネームカードの記入と大わらわの事態となり、大盛況に涙ぐんでいる暇もありませんでした。会が始まってもしばらく受付業務のため、料理にろくに手も付けられなかった濱口えりか、笠島里美両氏には改めてお礼申し上げます(教授就任祝いの品の用意も彼女たちにお願ひしました)。

定刻を少し過ぎたころ、やや緊張した面持ちの山城輝久の司会で同窓会は始まり、まずは天折した物故者に対し出席者全員が起立し黙祷をささげました。そして、乾杯の挨拶は受付時に引いたくじで当たった西辻雅でした。とても緊張している彼の素朴な一言一言が参加者の心を逆にほぐしていった瞬間でした。その後、食事を開始してしばし歓談の後に一言ずつの近況報告とも考へましたが、今回は出席者も多く、報告だけで会の時間のほとんどを使ってしまふ可能性があったため、二十年ぶりに一堂に会した空気を満喫してもらえよう敢えてフリートークといたしました。

会は大いに盛り上がり、加賀屋グループの懐石コース料理も滞りなく運ばれ、飲み放題も十分元はとれたようでした。途中に、新教授三人が挨拶をし、同級生から記念品を贈呈しました。プレゼンターは学生時代にゆかりの深かった女子の同級生でした。新教授諸君はそれぞれ就任までの道のりや各方面への感謝、未来への意気込みを熱く語り、何かとやり玉にあげる日本の医療・医学研究も決して捨てたものではない、すばらしいものだど確信した次第です。そして、受付時のくじで当たった柳下信一の音頭で、参加者全員が手に手を取って輪になり万歳三唱をし、集合写真を撮って中締めとなりました。

続く二次会は四十人乗りの大型バスを準備して片町まで送迎するという計画が功を奏し、受付時は二次会不参加だった多くの人が参加に変更し、東京出張から駆け付けた武藤寿生も加えて実に四十七名がこの学年にゆかりの深い倫敦屋酒場の二階を占拠しました。注文よりも懐かしい顔に店員と記念に写真を撮り出す始末で、全員に飲み物が行きわたらず乾杯までに時間がかかったのが唯一の反省点です。二次会司会の安間圭一の音頭で乾杯し、二時間以上、ビールやワインとつまみ料理で歓談し、学生時代のように打ち解けて楽しめたとの感想を大勢からもらいました。二次会の締めあいさつは松任良樹でした。「次回は五年後に開催



しよう!」との再会を約束し、三次会に向かう者、翌日の早朝からの業務のため家路につく者、各人が三々五々散っていききました。

稿を終えるにあたり、今回の同窓会の企画、準備と当日の進行を共に行ってく

# 金沢大学十全山岳会慰霊山行 Hillary Hospitalを訪ねる

平成二十六年年末から平成二十七年年初にかけて、田辺隆二会長以下六名の十全山岳会有志はヒマラヤ山麓を訪れた。この山行は昭和六十三年、日本・中国・ネパール三国の友好登山隊によるエベレスト交差縦走に医師隊員として参加し、ペースキャンプにおいて、くも膜下出血で急逝された故水腰英隆先生（昭和四十二年卒業）、および平成二十四年にゴキョ峰登山中に高山病で斃れた故窪田孝先生（昭和五十三年卒業）の慰霊を目的としたものであった。



写真1 Hillary Hospitalのスタッフと登山隊一行。

当山岳会は、昭和二十九年以来、立山・剣岳一帯で夏山診療活動を行ってきたが、近年、この一帯の山小屋で働くシェルパ族の人々と友好を深めてきた。今回の山行の後半は降雪と強風に苦しめられたが、彼らの全面的協力を受け当初の目的を達成することができた。

平成二十六年の大晦日、我々は、標高三七九〇mにあるシェルパ族の村クンデを訪れた。この村には、エベレスト初登攀をなしたEdmund Hillary卿によって昭和四十一年に創設されたHillary Hospitalがある。かつては欧米人医師が診療に従事していたが、現在は地元で運営されているらしく、ミンマ シェルパ医師が迎えてくれた。夏季のみ開設される我が剣沢診療所とは当然比較すべくもないが、レントゲン撮影装置、超音波診断機器、新生児保育器が完備しており、年間約三十例の分娩をこなす立派な病院であった。

（写真1）  
村を見下ろす小高い丘の中腹には、Hillaryと不慮の飛行機事故で亡くなった婦人と令嬢の記念碑がある。我々は、ここから窪田孝先生の亡くなったドーレ村（四〇四〇m）をはるかに望み黙祷した。



写真2 カラバタール頂上にたなびく両先生の祈禱旗。稜線にはヒマラヤの山々が連なり、下方にはクーンブ氷河の一部が見られる（水腰英四郎撮影）

森紀喜らの本隊四名は、ここからさらに高度順化を計りながら奥地に進み、平成二十七年一月八日に強風吹きすさぶ五五四五mのカラバタールの頂に到達した。山頂で、同行したアンヌルシェルパが作ってくれた祈禱旗（タルチョ）を掲げた後、エベレストの頂を仰ぎ見ながら両先生のご冥福をお祈りした。（写真2）  
（大井 章史 記）

ネパール地震に被災された方々  
心から御見舞申しあげます

れた仲間、そして快く参加して会を盛り上げてくれた全ての同級生に感謝とお礼を申し上げます。今回残念ながら業務その他の事情で来られなかった同級生たち、連絡の取れない人、次回以降も必ず誘いますので、参加してください。新たなメーリングリストを山城輝久が作ってくれました。また、Egoboonのグループもあります。五年後の第二回同窓会までの間、各地で頑張る仲間、金沢に来た際に集まる仲間のプチ同窓会も知らせたいと思います。今回より十全同窓会名簿の編集もお手伝いする宮内修に気軽にお問い合わせ（miyauchi.ganka@gmail.com）ください。

出席者 五十八名（学生時代の名簿順）  
山口朋子、新羽正明、橋口光子、石塚修一、伊藤秀明、笠島里美、岩戸雅之、中村暁子、大坪公士郎、納村直希、金田礼三、菊知充、加畑千春、小杉郁子、佐伯隆広、坂本雅之、代田幸博、新保純、鈴木健司、鈴木智成、高田綾子、高橋和也、多嶋佳孝、俵矢香苗、菊地さおり、付岡正、加賀谷真希子、鶴岡智、中田光俊、長田信人、西辻雅、濱口えりか、橋本慎太郎、長谷川敦俊、原拓央、平松活志、松任良樹、松本正夫、丸山美知郎、三崎智範、湊屋剛、宮内修、宮下洋亮、月岡泰子、武藤寿生、諸岡智行、池淵香瑞美、柳下信一、安間圭一、山内大輔、山門浩太郎、山城輝久、吉田敦、吉見雄三、吉本勝博、若山友彦、村田淳、古荘浩司  
（宮内 修 記）

## 十全昔話

## 十全昔話

円山 えんやま

義一 ぎいち (昭和十八年卒業)



御存知「蘭学事始」は吾が国に初めて入つて来た蘭学に驚いた杉田玄白の回想録である。

当時日本の医師達を驚かしたのは、彼の国の人から入手した人体解剖の図譜だった。そこには「古来医経」説キタル肺ノ六葉両耳・肝ノ左三葉・右四葉ナド言ヘル分チモナク、腸胃ノ形状モ大イニ古説ト異ナリ・・と云う具合で、人体解剖と云うことをやって来なかつた当時の吾が国の医師達を大いに途惑わせるものであった。人間の体が本当はどうなのか、迷つた医師達が向かつたのは骨ケ原刑場であった。自分の目で確かめるのである。そしてその帰途、杉田玄白達は語り合つたと云う「苟クモ医ノ業ヲ以テ互ニ主君タニニ仕ヘル身ニシテ、ソノ術ノ基本トモスベキ吾人ノ形態ノ真形ヲモ知ラズ、今迄一日々ト此業ヲ勤メ来リシハ面目モナキ次第ナリ・・」と。解剖の体験もなく医業に従事して来たことを反省し合つている。

しかし、当時遺体解剖と云うことは吾が国の習慣には馴染まなかつた。吾が国では今も精進の習慣があり、遺体とは云えそこにメスを入れる等と云うことはとても思い及ばぬ事であった。

京都大学の星野正教授は云う。先任地である人口約五十六万のカナダ第四の都市に居たとき、解剖実習に提供された遺体は、年にもよるが百体くらいだった。しかし、人口約百五十万の京都に戻つてみると、献体は僅か二十五体くらいなのに驚いた。それで何故かと思つて調べてみたら、

それは日本人の国民性による事が分つたと言つている(日本解剖学会百年誌)。

国民性とはいえ現実の問題として病人が居る以上「医師がその体の構造を知らぬ」では話にならない。つまり解剖は避けては通れないことは自明の理である。

岩手医科大学は昭和三年岩手医学専門学校として設立された。創立当初は解剖実習室も未完成で、又献体も集まり難かつたようだ。そこで解剖の村上幸次教授は講義室の廊下に六尺机を解剖台代りにして自ら執刀し、学生達はこれを三重四重に取囲んで見学していた。岩手医科大学の解剖学教室はこの後、本学の二井一馬氏が教授となつて赴任し、以来本学の解剖学教室とは親類付合いみたいな関係が出来ている。岩手から来た金大解剖の岡本規短男教授、次いで石丸士郎教授のもとで学び、再度岩手の解剖学教室等を経て、最後は内灘の金沢医科大学教授を勤めた植木春三教授等はそのいつた人だ。

一九五五年篤志解剖献体をする「白菊会」と云うのが東大に出来た。慢性的な解剖献体不足に対応する為のものである。これが国内献体運動の初めだと思ふ。本学でも一九六九年に山田致知教授が篤志解剖「しらゆり会」を発足した。篤志解剖と云うのは自分の意志で無条件、無報酬で医学の為に自分の遺体を提供するのを云う。

山田教授は東大出身で岡山大学に就任していたが、本学の石丸士郎教授が定年で退かれ、その後任として赴任して来た方である。赴任当初はしばしば鯨の先生として新聞に載つたので御存知の方も多かるう。彼は将来を見越して、本学で「しらゆり会」と云うのを発足させたが、それだけでは足りない。御自身もこの会に加入

献体している。言うは易く行は難しと云うが、誰にでも出来ることではない。

山田致知教授は一九七〇年四月には日本解剖学会献体委員長に就任。その後も全国的な献体確保運動をし、一九八七年五月に「医学および歯学の教育のための献体に関する法律」の制定にも寄与している。

私は退官後も解剖学教室と云う古巣に何かと用事が出来、事ある毎に行き来していたが、ある時山田教授の小立野の御自宅を訪ねたことがある。その時、お宅にモリアオガエルが居るのを知った。実は吾が家にも何時の頃からかモリアオガエルが産卵していたので、解剖とモリアオガエルには何か因縁でもあるのかと笑い合つたものである。

話は別だが、解剖の松田健史助教授(後の富山医科薬科大学教授)を訪ねたことがある。何の用で訪ねたのか思い出せないが、午後十時頃だった。当時の解剖学教室は人数も多く、どの部屋も夜は十二時頃まで灯りがついていて、用事を終えて帰りがけた時だった。「今こんな事をしている」と言つて見せてくれたのが染色体、つまり二十二組四十四本の常染色体と二本の性染色体からなる例の図であつた(これは後に松田教授の名で看護学校の教科書に載つた)。そして此の時、私のデカイ声が聞こえたと言つて本陣良平教授(後の学長)がやつて来て、「僕の部屋へも寄つていかないか」と誘われた。その時聞いた話では、今度大学に電子顕微鏡が二台入り、うち一台がグルンドの本陣先生の方へ来ていると云うことだった(もう一台は産婦人科と聞いたようにも思うが記憶に自信はない)。そして久しぶりに会つたから土産を作ると言つて何かいじつていたが、出来上がつ

たのは自作の私の名刺だった。

先般お互い高齢で、クラス会を開き一杯やるのは無理と分かり、代わつてペーパークラス会にしようと、その資料集めのため解剖学教室へ行つてみた。しかし、残つていたのは標本庫くらいで、移行行く時の速さを感じた。帰宅し書棚に眠つている「蘭学事始」を久しぶりに開いてみた。それは文庫本であり、あちらこちらかなり傷んでいた。そしてその巻末には昭和十五年十月一日第十三刷発行、定価二十銭(円ではなく銭)と書いてあり、而もこの日付は私が初めて解剖台に立つた時であつた。

話が飛び飛びでまとまりが無いが、最後に一つ。

学生時代下宿していたのは大学正門の真向いで、毎日三度の食事は病院の栄養部へ行つて食べると云う風だったので、大学の構内はすべてマイホームみたいな感じだった。

ある時知りたいた事があつて解剖学の岡本教室を訪ねた。だがマズかつた。うっかりいつもの着流し姿、下駄履きだったからたまらない。教室のエライ先生に見咎められた。「ちよつと君、学校へ来る時は和服でもいいが、その時は袴を着けて来るんだ」。

おっしゃる通りで返す言葉も無かつた。その先生は後年私が戦地から負傷して帰つて来た時にはもう在籍されてはいなかつたが、その後あの時の御縁で時々お便り等戴く仲になつた。縁は異なるもの味なものと云う。

今ではみんな遠い昔話になつてしまった。近年は、畑と本の出版に勤しむ毎日である。

円山 義一 (えんやま ぎいち)

大正11年4月30日生まれ  
元、金沢大学医学部助教授 (解剖学)  
医学博士  
能登文化財保護連絡協議会顧問  
医療法人社団生学生会長

〈既刊〉	
ぶらり壬申の乱を歩く	2000年 4月28日
鄙が良かった家持卿	2000年12月22日
雨乞い沢	2001年 5月31日
土日に読む解剖生理学	2002年 4月30日
横向きに座る大國主神	2003年 8月14日
親鸞紀行	2004年 9月 4日
統土日に読む解剖生理学	2006年12月22日 (初版)
からだどヒト百話	2010年11月15日 (第2版)
義経伝説を訪ねて	2008年6月18日
今昔能登の路	2010年5月15日
月日の誌 いのち拾いで	2014年8月14日

思い出のかずかず

加田 幸治 (昭和二十九年卒業)



昭和二十年旧制松江  
高校に入学してみる  
と、ドイツ、カールツア  
イス社製の十五糎屈折

望遠鏡が校庭の一隅に置かれてあった。  
七十年前の当時は十五糎と雖も我々に  
とつては最高の望遠鏡であったから、それに  
出会った瞬間が宇宙探求の始まりとなった。  
戦前旧制中学時代は音楽に熱中し、親  
友の豊島雅一郎君とヴァイオリンやピア  
ノを習いに通っていたので、戦後は音楽  
と天文学の二兎を追う事となった。  
豊島君は東大を出て日本有数の船会社の  
会長になった秀才であるが、多忙と共に音  
楽を中断した事をいたく悔んでいた。  
二兎を追うとは云つても、病院勤務中は  
流石にその時間も無く、四高の寮歌の如く  
「健児脾肉を嘆せしが」であり、やがて開業



するや「遂に南下  
の時刻」となって  
再び二兎を追いは  
じめたのである。  
生れ育ちは山陰  
の松江であり、大  
学は北陸金沢であ  
るから曇る日が多  
く、晴天率日本一  
を尋ねた処が山梨  
であった。  
街の灯が少く眺望の良い処に天文台を  
造り、短い余生で一夜でも多く宇宙を観  
ようと考えたのである。

友人が「君は何故日本のチベットのよう  
な処に住んでいるのか？」と手紙を呉れた  
事があったが、そのチベット様の我が丘の  
真正面に富士山と宇宙を眺める天文台を  
造る事が出来た、昭和四十年であった。  
日中は診療に従事し、夕刻天文薄明迄  
はショパンのワルツ集を弾き、夜晴れれ  
ば天文台に、曇れば囲碁を楽しむ事が多  
い。二十六年県囲碁大会で優勝してし  
まったが、趣味のみに明け暮れしている  
訳では無く、頼まれ、ば深夜の往診も厭  
わずに出かける現役である。

振返ると多くの親友が天界に去ってしまっ  
た。その中でもT君の愉快な思い出は忘れ  
られない。熊本五高出身のT君は九州男児  
で冷靜沈着、当然酒豪でもあった。下宿は  
等舞町で小生と同じであったから、飲むのも  
一縮の事が多かったが、或る夜珍しく一人で  
酩酊した彼は、帰宅したつもりでトントんと  
二階に上り、布団に潜り込んで熟睡、朝目  
覚めると、そこにはカイズル髭の陸軍大佐殿  
が正座して居られるではないか。  
「日本男児が酒如きに呑まれて、娘の寝床

に入るとは何事か、恥を知れ！」  
T君は平身低頭し、やがて近所の医学  
生と判り許して貰った。後刻友人一同呵  
呵大笑したものである。T君は九州で開  
業後、先年亡くなられた。  
昭和三十年第二解剖教室の花見会を終  
えて兼六園を後にした筈であったが、二  
次、三次と進み、残ったのは助教授の矢  
部健治先生と小生の二人だけ、翌朝目覚  
めると「お目覚めですか？」と優しく声  
をかけられて気がつけばそこは広坂警察  
署の机の上であった。  
矢部助教授は硫黄島生残りの豪傑で  
あったが、この朝ばかりは二人共平身低  
頭して、署から教室へ出勤し、話を聞いた  
教室員一同に大笑されてしまった。  
その後第二外科へ入局してからは病院  
勤務に忙殺され、約十年間は自由時間O  
が続いた。天文台建設を夢見乍らの修業  
中であつたから、多忙でもそれを苦痛と  
は感じなかつた。  
沢山の先輩から指導戴いた思い出は盡  
きない。  
時代が前後するが、終戦の年旧制高校  
で音楽部を再興した我々は、当時一流の  
音楽家(諏訪根自子さん達)を招聘した  
り、音楽会を開催して地方都市の文化昂  
揚に努めたものである。  
宍道湖に面した我が家の庭に繋がれて  
いる舟に音楽部員を乗せて男声合唱を  
しつつ夕日  
の湖に出る  
と、途中湖  
岸の旅館か  
ら進駐軍が  
一斉に拍手  
をして、曲



名を尋ねてくれた。  
今でも湖上のコースは最良の思い出  
として残っている。

旧制金沢医大に進学された先輩から「お  
前も金沢へ来て音楽部に入れ」と奨められ  
金沢を受験する事となった。  
当時は七帝大、六医大と云つて、国立  
の医学部は全国に十三しかなかった。小生  
の場合は案外単純な理由でできてしまった  
のである。入試の時、口頭試問で宮田病理  
教授が「君は高校時代何をやっていたんだ  
ね？」とお尋ねになられた。不勉強を問わ  
れたと感じたが、「和声学、作曲法とドイ  
ツ語を主にやっていました」と神妙に答え  
ると、先生はニコリして「今の医学生に  
はそういうのが良いんだよ」と仰つた。  
音楽や天文学に熱中し乍ら医師になれた  
事を振り返ると良き時代であつたと思ふ。  
昨今は天文現象を追うよりも、宇宙論  
を学ぶ方が楽しくなつてきた。誰でも考  
えるのが宇宙の果てはどうなつてい  
るか？つまり空間は無限だが宇宙は有限で  
ある、と考えるのは正しいのか？多次元  
宇宙の存在は？暗黒エネルギーによる宇  
宙の膨張説、宇宙の起源は四次元ブラッ  
クホール説等興味は盡きない。  
無医村に入つて医療に従事すること五十  
余年、もうそろそろ現役隠退をと申し出た  
ところ全住民から猛反対され、健康だから  
死ぬ迄やれと云われて困惑している処であ  
る。愚息二人は別の処で開業医、勤務医を  
して居り、おまけに天文台に興味を示さず、  
子供時代に仕込んだ音楽も多忙を理由に  
中断して了つた。まあ世の中はそんなもの  
だが、せめてオリオン座を中心に七つの一  
等星で煌々、冬空のGぐらいは知つて欲し  
いと思つているこの頃である。

## 医師国家試験結果

医学類長 多久和 陽

第一〇八回医師国家試験結果が厚生労働省より三月十八日に発表され、本学の新卒受験者は見事一〇〇%の合格率を達成しました。過去十年間では第一〇五回の九十八・一% (全国八十医学部・医科大学中九位) が最高の成績であり、昨年は九十五・〇% (四十二位) でしたので、本年は一気に全国トップに駆け上がりました。金沢大学の他に、慶応義塾大学、浜松医科大学、千葉大学、帝京大学、鳥取大学の五校も新卒一〇〇%合格を達成しました。新卒に限った全国受験者全体の合格率は、九十四・五%と前年より〇・六ポイント上昇しました。

既卒者と合わせた総合合格率は九十七・一%で全国九位でした (全受験者の合格率は九十一・二%)。金沢大学の既卒者は九名が受験し、三名は残念な結果になりました。新卒者の成績は、各大学の現時点での教育の実態をよく反映するとされており、一〇〇%という本学の成績はたいへん誇らしい結果と思います。これは、自習室の整備や統合卒業試験を実施するようになったこと、また医王保護者会のご援助により、eラーニング教材の導入や模擬試験を実施していることが効果をあげたと考えております。一方、今後の戒めとするべきかと思われる点として、六年前の入学時の定員一一〇名 (編入学生を含む) に対して第一〇九回の合格者人数が九十五名であり、 $95 \div 110 = 86.4\%$  の数値が一〇〇%の合格率を達成し

た六校中五位であったことです。これは、この学年では留年生が他学年に比較して多く、ストレートで卒業できた学生数がここ数年で最も少なかったということですが、全国の医学部では、近年留年生の増加が目立ってきております。金沢大学でも留年生は増加傾向にあります。学生支援委員長を中心として成績不振学生へのきめの細かい対応を強化し、また医学類教員による専門教育の早期導入により入学生の医学への関心を高め向学心を養う、といった取り組みを始めており、今後成果がでることを期待しております。

第109回医師国家試験結果 ※ ( ) 内は第108回結果

	受験者	合格者	不合格者	合格率	全国平均
平成27年3月卒業生	95名 (101名)	95名 (96名)	0名	100.0% (95.0%)	94.5% (93.9%)
平成26年3月以前の卒業生	9名 (7名)	6名 (2名)	3名	66.7% (28.6%)	57.0% (61.7%)
合計	104名 (108名)	101名 (98名)	3名	97.1% (90.7%)	91.2% (90.6%)

## 同窓生の消息

### 日本総合健診医学会第四十三回大会報告

平成二十七年二月二十日・二十一日の両日、富山国際会議場と富山市民プラザにおいて、表題の大会を開催しました。私は岡本宏 (昭和三十九年卒業)、山本博 (金沢大学副学長、昭和五十年卒業) 両先生のもとで遺伝子研究をしていたことがあり、今回のメインテーマを「個々の疾病リスクに対応できる総合健診をめぐして」とし、遺伝子診断を大きく取り上げました。二十日には大阪大学名誉教授の松原謙一先生から「未病社会の診断技術について」、金沢大学病院消化器内科教授の金子周一先生 (昭和五十七年卒業) から「血液による消化器がんの遺

伝子診断」の特別講演と、「遺伝子診断の現状と未来」のシンポジウムを行いました。また私がシドニー大学でお世話になったDon Zingales教授を英国から招聘し、ヘルスリテラシーの講演をしていただきました。さらに三つの教育講演と二つの産業医研修会を持ちました。教育講演の一つ目は富山通信病院院長の高田正信先生 (昭和四十八年卒業) の「自動血圧計装置の進歩と課題」、後の二つは「日本再興戦略の目標と健診機能の役割」、「職場のメンタルヘルス対策における新展開」というものです。産業医研修会では城戸照彦先生 (金沢大学保健学系教授、昭和五十四年卒業) から有害業務管理のお話をいただきました。二十一日にはシンポジウムを二つ開催し、一つは「生活習慣病関連項目の基準値」という内容で、三浦克之先生 (昭和六十三年卒業、滋賀医科大学教授) をはじめとして、日本高血圧学会、日本糖尿病学会、日本動脈硬化学会から推薦された先生方をシンポジストとしてお招きしました。またアンチエイジングのシンポジウムを日本抗加齢医学会との共同企画として行いました。一般演題数は百六十一、参加者は八百六十五人でした。残念ながら北陸新幹線の開業には間に合いませんでしたが、幸い天候がよく立山連峰もきれいに見え、県外からの参加者に望外のおもてなしができたと思っております。

(山上 孝司 記)



## 学生コーナー

### 医学生に大切な事

医学類五年 伊藤 泰斗

十全同窓会会員の皆様、初めまして。

私は医学類五年の伊藤泰斗と申します。私がこの学生コーナーに記事を書かせて頂ける事となったのは、国家試験対策委員の委員長という役職を務めさせて頂いているからであると思っております。ですので、少々長くなりますが、その委員会で経験を通じて私なりに考えた事を書かせて頂きたいと思っております。

まず本題に入る前に、国家試験対策委員とはなにかということの説明させて頂きたいと思っております。国家試験対策委員、略して、「国対」は、三年生が終わる頃に選出されます。各学年四、五名ほどで組織され、医王保護者の会と協力させて頂きながら、その名の通り国家試験対策をしていく委員会です。具体的な仕事といたしましては、大きく分けて二つあります。

一つ目は、自分たちの学年のサポートです。私たちは、四年次に行われるCBTや六年次に行われる国家試験に向け、先生方の講義の他にも、自主学習用の教材として医師国家試験予備校から、インターネットを使って視聴できるビデオ講座を選択出来ます。学生のほとんどはこのビデオ講座を利用しており、国対は予備校と学生の窓口になり、その申し込みの手続きなどを担当します。二つ目は、六年生のサポートです。六年生が国家試験を受けるとき、四、五年生の国対委員は受験当日のバスの手配や、会場で六年生の休憩ブースを作り、休み時間に飲み

物や軽食の配布をしたりします。国対の仕事の中ではこの仕事が一番メインだと思っております。自分がお世話になった先輩をサポートする機会を頂けるというのはやはり嬉しいものです。

私も二月に行われた国家試験では、実際に会場に行き国対の仕事させて頂きました。その時四年生だった私は、国家試験がどのような物なのかいまいち想像する事が出来なかつたので、実際に国家試験を受けている六年生の近くでサポートさせて頂けたことはとても有意義な経験でした。国家試験は三日間の長丁場で、問題も年々難しくなっている、しかし合格率は九〇%を超えるくらいでほとんど受験者は受かるはずという状況はとてつもない緊張感を生み出すと思います。そのような試験が行われている会場は一体どんな雰囲気になるのかと、国対委員として会場に行く前、私まで緊張していました。会場に到着すると、参考書を持った先輩方が最後の確認をしていてやはり緊張感が漂っていました。一日目が終わり、二日目も私は会場に行きお手伝いをさせて頂きました。三日間あるうちの二日目ですので、六年生のみなさんは疲労が溜まってくる頃だと思えます。しかし、ある六年生の方が休憩ブースにいらして、「国対委員も大変だね。本当にありがとう。」とおっしゃいました。私は、ご自分が大変な状況の中で、後輩の事まで気を使われていた事に本当に感謝を受けました。さらに、そのような言葉をかけて下さった六年生の方々はたくさんいらつしやう、心の底から素直にすこいなあ、と感じました。昨年度の金沢大学新卒の方の国試合格率は一〇〇%だつ

たということ、本当に後輩ながら誇りに思っております。

さて、この経験を通じて私が考えたことは、医学生にとって必要な事とは何かということ。もちろん勉学は必要です。知識がないと国試に合格はできません。しかし、それだけでいいのかということ。国試本番のような厳しい状況の中でも他の人を気遣える卒業された先輩方のような医学生になりたいと思えます。そのような先輩はきつと立派な医師になるでしょう。そのために必要な事はどのような事なのでしょうか。

私が、金沢大学を受験した時の面接官であった教授がおっしゃった言葉で印象的な言葉があります。それは、「医学だけの人間になるな」という言葉でした。その言葉を頂いた時、私は面接の最中だったのでその言葉の意味を深く考える余裕はありませんでしたが、今改めて考えてみますと、広い視野、視点を持ちながら勉学に励みなさいという意味だったのでないかと思えます。広い視野、視点は単に医学を勉強しているだけでは到底身に付きません。大切なことは、人間関係を広げていく事であると思えます。私の同級生には世界を舞台に活躍しようという目標を持ち、様々なことにチャレンジをしている友人がいます。彼のアクティビティは私の目標であり、五年生からは自分で色々な事にアクティブに挑戦していきたいと思っております。そして、様々な人と関わり合い、様々な事を吸収していきたいです。そうすれば、広い視野、視点を持つことができるのではないかと思います。

話は少し変わりますが、私の理想とす

る医師像は、患者さんとはもちろんコミュニケーションの方々とも信頼しあつて和気藹々と医療を行って頂ける医師です。私は、五年生になる前の春休みに東京のある病院で一週間の病院見学をさせて頂きました。私は後期研修医の方につかせていただいたので、どのような仕事をされているのか見させて頂きました。仕事をされている様子は本当に忙しく、付いて歩いているだけの私も一週間終わってみるとどつと疲れてしまうほどでしたが、その先生は患者さんにもコミュニケーションの方々にも厚く信頼されていて、私の理想の医師像通りの先生でした。お忙しいのにも関わらず、色々な事を学生の私に教えて下さり本当に感謝しています。その先生の経歴についてお話を聞く機会があつたのですが、医学部に入る前に違う大学を出ておられて、様々な経験をされている方でした。現役で医学部に入った私は、人生経験の浅いまま医学を勉強し始めました。この四年間を振り返ってみますと、試験や部活に追われてしまい目の前の事を処理するのが精一杯でした。色々なことを経験し、どんと構えていられるような人間を目指したり、先ほど書いたように人間関係をアクティブに広げ、広い視野、視点を手に入れたりする余裕がはつきり言って全くありませんでした。その一方で、先ほどの彼のように着実に目標に向かって進んでいる友人もいるのです。私の将来の目標はまだまだ曖昧なものです。五年生の間は医学をしっかりと学びながら、自分にとって医学以外に必要な物、そしてそれを手に入れるためにはどうすればいいかということを考えていきたいと思えます。

## 謝恩会

三月二十三日、金沢ニューグランドホテルにて平成二十六年卒業生による謝恩会が執り行われました。

会には多くの先生方にご出席いただき、和やかな雰囲気の中開会しました。まず井関尚一学域長からお言葉を頂き、多久和陽学類長の乾杯の音頭で宴会が始まりました。

さらに並木幹夫病院長、堀修前学生支援委員長より、お言葉を頂きました。

今年は、卒業生によるバンド演奏や、ビンゴ大会が行われました。そういったレクリエーションの中、六年間の大学生活を回想しつつ、学生と先生方が交流し、これまで知らなかった学生、先生方の一面も垣間見られ、ともに大変楽しめたものとなったと感じております。

思い返すと一年一年は長いもの、あつという間の六年間でした。その間、多くの先生方や同級生に支えられてきたことを実感し、感謝の気持ちが自然とわき上がってきました。

今年度は勉強場所が確保しにくい中、改修された図書館のグループスタジオや学生食堂の2階の部屋を自習室として提供して頂き、ビデオ講座や模擬試験などの国家試験対策を手厚くして頂きました。心から感謝申し上げます。最後に、卒業生代表の谷中惇君が卒業生を代表して挨拶し、大盛況の下で閉会となりました。

平成二十六年度の金沢大学医薬保健学域医学類卒業生は多大なるお力添えの

おかげで医師国家試験の現役生合格率一〇〇%を達成できました。これからの後輩たちにも期待しつつ、金沢大学医薬保健学域医学類で学び成長できたことを



誇りに思い、各々が新しい環境の下、精進していく所存です。最後にになりましたが、謝恩会にご参加いただいた先生方、そして六年間ご指導いただいた先生方、大学関係者の方々に

改めて感謝し、心よりお礼申し上げます。ありがとうございました。今後とも、ご指導ご鞭撻の程よろしく願います。(平成二十六年年度謝恩会実行委員長 辛 紀宗 記)

### 平成二十七年三月卒業生進路

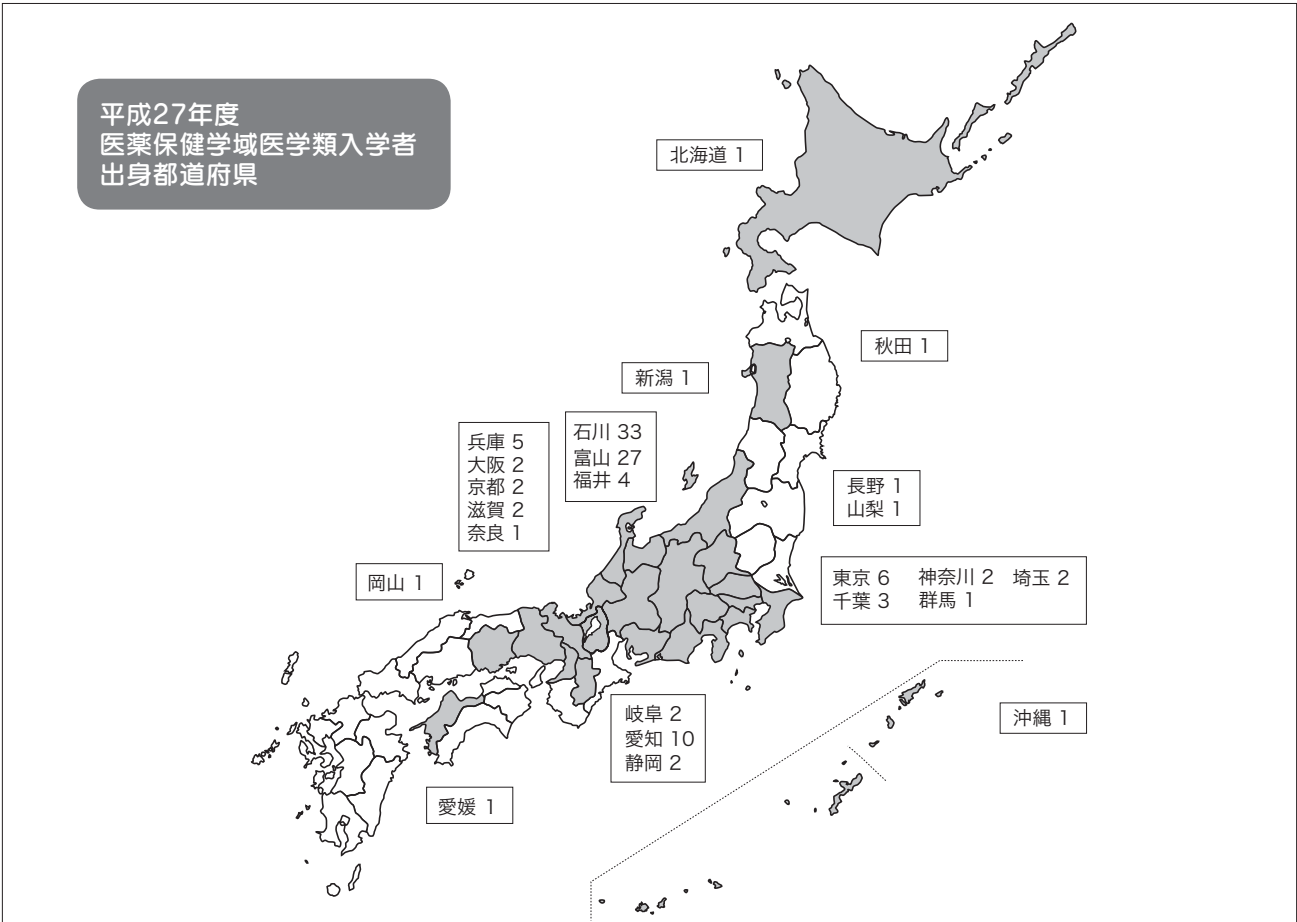
- |       |                    |       |               |
|-------|--------------------|-------|---------------|
| 青山 周平 | 金沢大学附属病院           | 小川 詩季 | 滋賀医科大学医学部附属病院 |
| 秋葉 力  | 公立学校共済組合           | 小野田祐司 |               |
| 浅川 愛里 | 関東中央病院             | 笠原 理愛 | 金沢大学附属病院      |
| 浅川 哲也 | 独立行政法人国立病院機構       | 勝海 大輔 | 国保松戸市立病院      |
| 浅野 由希 | 金沢医療センター           | 加藤小百合 | 岡山大学病院        |
| 浅野 陽平 | 豊島病院               | 加納 重宗 | 大垣市民病院        |
| 飯田 圭輔 | 金沢大学附属病院           | 加畑映理子 | 金沢大学附属病院      |
| 石黒 聡  |                    | 釜蓋 明輝 | 金沢大学附属病院      |
| 石田 卓也 | 金沢大学附属病院           | 神田 怜  | 関東労災病院        |
| 板倉 卓司 | 東京女子医科大学           | 北川 恭子 | 神戸大学附属病院      |
| 一ノ瀬惇也 | 福井県立病院             | 木戸 秀典 | 独立行政法人国立病院機構  |
| 伊藤 賢一 | 横浜市立大学附属市民総合医療センター | 木村 亮堅 | 金沢医療センター      |
| 稲端 翔太 | 東京医科歯科大学医学部附属病院    | 黒澤 紀雄 | J A長野厚生連      |
| 岩田 成志 | 恵寿総合病院             | 小島祥太郎 | 千葉大学医学部附属病院   |
| 江端 知美 | 石川県立中央病院           | 後藤 有基 |               |
| 大石龍之介 | 静岡済生会総合病院          | 小林 崇史 | 石川県立中央病院      |
| 大嶋 芳美 | 金沢大学附属病院           | 小林 知博 | 金沢大学附属病院      |
| 大庭 建  | 独立行政法人国立病院機構       | 小林 源哉 | 金沢大学附属病院      |
| 岡田 充生 | 東京医療センター           | 古山 和憲 | 金沢大学附属病院      |
|       | 東京都立広尾病院           | 齊藤 浩志 | 石川県立中央病院      |
|       |                    | 佐久間敬之 | 横浜市立市民病院      |
|       |                    | 佐々木 允 | 金沢大学附属病院      |
|       |                    | 柴山 純一 | 石川県立中央病院      |
|       |                    | 辛 紀宗  | 横須賀市立うわまち病院   |



末吉 俊貴	神戸赤十字病院	水口 義規	惠寿総合病院
鈴木 淳也	独立行政法人国立病院機構 金沢医療センター	水富慎一朗	富山県立中央病院
鈴木 拓馬	独立行政法人国立病院機構 金沢医療センター	三村 卓矢	金沢大学附属病院
関山 紘子	国立国際医療研究センター 病院	宮城 結	社会医療法人仁愛会 浦添総合病院
相馬麻由子	佐久総合病院	宮本 卓	東京医科大学病院
曾我部志乃	金沢大学附属病院	向坂 文治	石川県立中央病院
高山 慶太	福井済生会病院	村井 惇朗	福井県立病院
竹内 一喬	金沢大学附属病院	毛利 公美	横浜市立大学附属病院
立道 佳祐	金沢大学附属病院	望月 太郎	金沢大学附属病院
谷中 惇	金沢大学附属病院	森 俊輔	東京大学医学部附属病院
近川 由衣	金沢大学附属病院	盛田 玲奈	富山県立中央病院
坪川 結	横浜市立市民病院	八木 洸輔	横浜市立みなと赤十字病院
藤堂龍一郎	済生会川口総合病院	柳田 成史	国民健康保険 小松市民病院
豊田 洋平	惠寿総合病院	山岸 豊	姫路聖マリア病院
中井 文香	富山県立中央病院	山下 真依	石川県立中央病院
長井 一樹	金沢大学附属病院	山下 真	独立行政法人国立病院機構 名古屋医療センター
中田 竜介	金沢大学附属病院	山田 研策	独立行政法人国立病院機構 金沢医療センター
中村奈都紀	トヨタ記念病院	山田 真也	金沢大学附属病院
成川陽一郎	社会福祉法人聖隷福祉事業 団 聖隷横浜病院	山田 真也	厚生連 高岡病院
新田 斉久	杏林大学医学部付属病院	山田 遥平	金沢大学附属病院
林 雅人	富山県立中央病院	山本 怜奈	独立行政法人国立病院機構 金沢医療センター
原 賢人	金沢大学附属病院	横山 理菜	金沢医療センター
引地 俊文	金沢大学附属病院	吉田 謙	民医連社会医療法人新潟勤 労者医療協会 下越病院
日吉 史一	東京女子医科大学		
平井 大樹	福井県済生会病院		
平井 忠幸	富山県立中央病院		
平川 智絵	愛知県厚生農業協同組合連 合会 安城更生病院		
廣正 暁	金沢大学附属病院		
堀尾 浩晃	金沢大学附属病院		
堀部加那子	医療法人溪仁会 手稲溪仁会病院		
松野 貴弘	富山県立中央病院		



(五〇音順)



## 同窓会名簿改訂についてのお知らせ

本年度は十全同窓会名簿改訂を行います。  
記載内容(住所や勤務先・役職等)に変更がある場合には、同封の「名簿掲載事項確認届」にて、十全同窓会事務局宛、またURL: <http://juzen-ob.w3.kanazawa-u.ac.jp/member/index.html> にごお知らせ下さいますようお願い申し上げます。

締切日 平成二十七年六月三十日(火) 必着

連絡先 千九二〇八六四〇 金沢市宝町十三番一号 金沢大学医学部 十全同窓会名簿編集係

E-mail [juzen@med.kanazawa-u.ac.jp](mailto:juzen@med.kanazawa-u.ac.jp)

FAX 〇七六・三三四・四二〇八 TEL 〇七六・二六五・二二三二

十全同窓会名簿編集委員長 大井 章史

HP上でも変更を受付けています。

URL: <http://juzen-ob.w3.kanazawa-u.ac.jp/member/index.html>



十全同窓会のHPよりリンクできます。

## 編集後記

うぐいすの鳴き声を聴きながら通勤する素敵な季節となりました。新年度が始まり、十全同窓会会員の皆様には素敵なスタートをきられたことと思います。

十全同窓会報百六十号をお手元にお届け致します。この三月に医学類および医学部から九十六名の卒業生を送り出しました。ご卒業誠におめでとうございます。さらに、本年度は新卒者全員が国家試験に合格するという嬉しいニュースもありました。多久和陽医学部長・医学部長の贈る言葉にもありますように、ぜひ偶然の出会いを大切にして、着実に歩まれることをお祈りしています。

本号には、九名の教授ご就任の記事が掲載されています。先生方の益々のご活躍とご健勝を心よりご祈念申し上げます。また、本同窓会会報の編集委員長をお務めになった山本博先生の教授退任記念のご挨拶が掲載されています。引き続き、本学の理事、副学長としてよろしくお願い致します。さらに、本年ご逝去された井上正樹先生、寺畑喜朔先生の追悼文が掲載されており、井上先生が十全医学会会長時代に取り組まれた基礎・臨床交流セミナーのアクティビティの高さを思い出します。寺畑先生が創立百五十年記念誌編纂に際して、本会報に連載されていた記念誌発刊準備のための「覚え書き」は大変参考になりました。おふたりの先生に学ばせて頂いたことに想いを馳せながら、ご冥福を心よりお祈り申し上げます。

本号にもありますように、創立百五十年周年記念事業の一環として施行されているキャンパス内の整備も進んでいます。馴染み親しんだ建物や木々が変わっていく一抹の寂しさもありますが、本学のさらなる展開・発展に繋がっていくと期待しております。

同窓会は人のつながりが重要な要素だと思えます。本会報により十全同窓会会員の皆様同士ならびに本学とのより強いつながりへの一助となれば幸いです。

(和田 隆志 記)